

独立行政法人国立文化財機構外部評価委員会評価報告書

—令和元年度—

独立行政法人国立文化財機構外部評価委員会

目次

1. 外部評価委員会評価結果

2. 外部評価委員会委員名簿

博物館部会

研究所・センター部会

令和元年度 独立行政法人国立文化財機構自己点検評価に対する外部評価委員会評価結果

中期目標大項目	自己点検評価	中項目	自己点検評価	小項目	自己点検評価	部会評価		総会評価		業務の ましまり
I. 国民に対して提供するサービスその他の業務の質の向上に関する事項	A	1. 有形文化財の保存と継承並びに有形文化財を活用した歴史・伝統文化の国内外への発信	B	(1)有形文化財の収集・保管、次世代への継承	B	B		B		博物館
						名児耶 B	河合 B	小笠原 B		
						浜田 B	小笠原 B	坂本 B		
						小松 B	坂本 B	名児耶 B		
						榊原 A	名児耶 B	寺崎 B		
				出川 B	寺崎 B	寺崎 B				
				A		A				
				名児耶 A	河合 A	小笠原 A				
				浜田 A	小笠原 A	坂本 A				
				小松 B	坂本 A	名児耶 A				
		榊原 B	名児耶 A	寺崎 A						
		出川 A	寺崎 A	寺崎 A						
		B		B						
		名児耶 B	河合 B	小笠原 B						
		浜田 B	小笠原 A	坂本 B						
		小松 B	坂本 B	名児耶 B						
		榊原 A	名児耶 B	寺崎 B						
		出川 B	寺崎 B	寺崎 B						
		B		B						
		名児耶 B	河合 B	小笠原 B						
浜田 B	小笠原 B	坂本 B								
小松 B	坂本 B	名児耶 B								
榊原 B	名児耶 B	寺崎 B								
出川 B	寺崎 B	寺崎 B								
B		B								
名児耶 B	河合 B	小笠原 B								
浜田 B	小笠原 B	坂本 B								
小松 B	坂本 B	名児耶 B								
榊原 B	名児耶 B	寺崎 B								
出川 B	寺崎 B	寺崎 B								
B		B								
名児耶 B	河合 B	小笠原 B								
浜田 B	小笠原 B	坂本 B								
小松 B	坂本 B	名児耶 B								
榊原 B	名児耶 B	寺崎 B								
出川 B	寺崎 B	寺崎 B								
A		A		研究所・センター						
(1)新たな知見の開拓につながる基礎的・探求的な調査研究	A	A			A					
		寺崎 A	河合 B		小笠原 A					
		寺田 A	小笠原 A		坂本 A					
		児島 A	坂本 A		名児耶 A					
		齋藤 A	名児耶 A		寺崎 A					
柳林 A	寺崎 A	寺崎 A								
A		A								
(2)科学技術を応用した研究開発の進展に向けた基盤的な研究	A	A			A					
		寺崎 A	河合 B		小笠原 A					
		寺田 A	小笠原 A		坂本 A					
		児島 A	坂本 A		名児耶 A					
		齋藤 A	名児耶 A		寺崎 A					
柳林 A	寺崎 A	寺崎 A								
A		A								
(3)文化遺産保護に関する国際協働	A	A		A						
		寺崎 A	河合 B	小笠原 A						
		寺田 A	小笠原 A	坂本 A						
		児島 A	坂本 A	名児耶 A						
		齋藤 A	名児耶 A	寺崎 A						
柳林 A	寺崎 A	寺崎 A								
A		A								
(4)文化財に関する情報資料の収集・整備に関する調査研究成果の公開・活用	A	A		A						
		寺崎 A	河合 A	小笠原 A						
		寺田 A	小笠原 A	坂本 A						
		児島 A	坂本 A	名児耶 A						
		齋藤 A	名児耶 A	寺崎 A						
柳林 A	寺崎 A	寺崎 A								
A		A								
(5)地方公共団体等を対象とする文化財に関する研修及び協力等	A	A		A						
		寺崎 A	河合 A	小笠原 A						
		寺田 A	小笠原 A	坂本 A						
		児島 S	坂本 A	名児耶 A						
		齋藤 A	名児耶 A	寺崎 A						
柳林 A	寺崎 A	寺崎 A								
A		A								
B		B		法人共通						
—		—								
—		—								
—		—								
—		—								
B		B								
—		—								
—		—								
—		—								
—		—								
B		B								
—		—								
—		—								
—		—								
—		—								
B		B								
—		—								
—		—								
—		—								
—		—								
B		B								
—		—								
—		—								
—		—								
—		—								
B		B								
—		—								
—		—								
—		—								
—		—								
B		B								
—		—								
—		—								
—		—								
—		—								
B		B								
—		—								
—		—								
—		—								
—		—								
B		B								
—		—								
—		—								
—		—								
—		—								
B		B								
—		—								
—		—								
—		—								
—		—								
B		B								
—		—								
—		—								
—		—								
—		—								
B		B								
—		—								
—		—								
—		—								
—		—								
B		B								
—		—								
—		—								
—		—								
—		—								
B		B								
—		—								
—		—								
—		—								
—		—								
B		B								
—		—								
—		—								
—		—								
—		—								
B		B								
—		—								
—		—								
—		—								
—		—								
B		B								
—		—								
—		—								
—		—								
—		—								
B		B								
—		—								
—		—								
—		—								
—		—								
B		B								
—		—								
—		—								
—		—								
—		—								
B		B								
—		—								
—		—								
—		—								
—		—								
B		B								
—		—								
—		—								
—		—								
—		—								
B		B								
—		—								
—		—								
—		—								
—		—								
B		B								
—		—								
—		—								
—		—								
—		—								
B		B								
—		—								
—		—								
—		—								
—		—								
B		B								
—		—								
—		—								
—		—								
—		—								
B		B								
—		—								
—		—								
—		—								
—		—								
B		B								
—		—								
—		—								
—		—								
—		—								
B		B								
—		—								
—		—								
—		—								
—		—								
B		B								
—		—								
—		—								
—		—								
—		—								
B		B								
—		—								
—		—								
—		—								
—		—								
B		B								
—		—								
—		—								
—		—								
—		—								
B		B								
—		—								
—		—								
—		—								
—		—								
B		B								
—		—								
—		—								
—		—								
—		—								
B		B								
—		—								
—		—								
—		—								
—		—								
B		B								
—		—								
—		—								
—		—								
—		—								
B		B								
—		—								
—		—								
—		—								
—		—								
B		B								
—		—								
—		—								
—		—								
—		—								
B		B								
—		—								
—		—								
—		—								
—		—								
B		B								
—		—								
—		—								
—		—								
—		—								
B		B								
—		—								
—		—								
—		—								
—		—								
B		B								
—		—								
—		—								
—		—								
—		—								
B		B								
—		—								
—		—								
—		—								
—		—								
B		B								
—		—								
—		—								
—		—								
—		—								
B		B								
—		—								
—		—								
—		—								
—		—								
B		B								
—		—								
—		—								
—		—								
—		—								
B		B								
—		—								
—		—								
—		—								
—		—								
B		B								
—		—								
—		—								
—		—								
—		—								
B		B								
—		—								
—		—								
—		—								
—		—								
B		B								
—		—								
—		—								
—		—								
—		—								
B		B								
—		—								
—		—								
—		—								
—		—								
B		B								
—		—								
—		—								
—		—								
—		—								
B		B								
—		—								
—		—								
—		—								
—		—								
B		B								
—		—								
—		—								
—		—								
—		—								
B		B								
—		—								
—		—								
—		—								
—		—								
B		B								
—		—								
—		—								
—		—								
—		—								
B		B								
—		—								
—		—								
—		—								
—		—								
B		B								
—		—								
—		—								
—		—								
—		—								
B		B								
—		—								
—		—								
—		—								
—		—								
B		B								
—		—								
—		—								
—		—								
—		—								
B		B								
—		—								
—		—								
—		—								
—		—								
B		B								
—		—								
—		—								
—		—								
—		—								
B		B								
—		—								
—		—								
—		—								
—		—								
B		B								
—		—								
—		—								
—		—								
—		—								
B		B								
—		—								
—		—								
—		—								
—		—								
B		B								
—		—								
—		—								
—		—								
—		—								
B		B								
—		—								
—		—								
—		—								
—		—								
B		B								
—		—								
—		—								
—		—								
—		—								
B		B								
—		—								
—		—								
—		—								
—		—								
B		B								
—		—								
—		—								
—		—								
—		—								
B		B								
—		—								
—		—								
—		—								

独立行政法人国立文化財機構外部評価委員会評価報告書

—令和元年度—

總會

独立行政法人国立文化財機構外部評価委員会

独立行政法人国立文化財機構外部評価委員会評価書（総会）

まとめ

機構全体評価へのコメント	
河合委員長	評価すべき全項目にわたって所期の目標をほぼ達成している。有形文化財の収集、管理については着実に努力の成果が上がっていることが認められ、展覧会事業においては平常展に安定した観覧者の増加が認められることは特に評価したい。外部資金の導入については引き続き工夫と努力のあることを期待する。調査研究に顕著の成果が認められるが、その成果を日常の展示（特別展を含む）や教育普及活動等の場に反映することが期待される。事務の効率化をすすめることに努めるとともに、増員を含めた常勤研究職員の安定した確保のための人件費の継続的な獲得には特段の努力を願いたい。後継者養成を一つの使命とするナショナルセンターとしてしての当機構博物館・研究所には、それがいわば責務であると考えている故である。
小笠原委員	私自身は、下記のとおり、単純にAが8個でBの6個を上回っており、総合的にはAだと思われる。年度末近くにコロナ禍があったにもかかわらず、展覧収入等の自己収入の確保が目標比及び前年比達成している点及び有形文化財に関する教育・普及活動に一定以上の成果があったことを高く評価したい。
坂本委員	特別展を密にすることによって博物館事業の収益性を高めてきたが、新型コロナウイルス感染拡大によって「新しい生活様式」が求められるなか、展覧会の事業計画や業績評価をどうするのか、根本から考え直す必要があるようだ。しかし一方で、諸外国と比較して国の文化政策や文化活動への支援はそもそも手厚いとはいえ、今春には入場料金を値上げして来場者の負担増に頼る形に至っている。これから先、ますます経済活動が優先されて文化が後回しになる可能性さえあり、機構としても、after コロナあるいはwith コロナ時代の新しい役割を、関連機関と連携して打ち出していきたい。
名児耶委員 (博物館部会長) ※以降同じ	全体として、年度末の新型コロナウイルス騒動の影響をあまり感じさせず、昨年同様に運営、活動は一定の成果を維持していたと評価できる。こうした状況を維持することが重要だが、新型コロナウイルス騒動への対策等、これからは、日常的業務の中でも異常事態への対応のあり方も検討しなければならないと思う。地道な活動を維持するための人材や予算の確保についての努力も続けてもらいたい。
寺崎委員 (研究所・センター部会長) ※以降同じ	全体として、所期の目標を十分に達成していると考えている。
【博物館業務】	
1. 有形文化財の保存と継承並びに有形文化財を活用した歴史・伝統文化の国内外への発信	
(1) 有形文化財の収集・保管、次代への継承	
自己点検評価 B 委員評価 B	
河合委員長	委員評価 B 第四期中期目標に基づき当該項目の計画はほぼ達成したものと評価する。各委員からのコメントにも文化財の購入、寄贈、寄託の推進に引き続き務めることが望まれている。ここにいま一つ提言すれば、美術品の美術館・博物館における公開の促進に関する法律に基づく登録美術品制度の周知とその活用に一層の努力をされたいのである。
小笠原委員	B 新規購入や譲受等の収集及びその保管は非常に地道な作業であると思われるが、所期の目標を達成していると思われる。
坂本委員	B 文化財の収集活動は、歴代の担当者と所蔵家との長年の信頼関係が各館に受け継がれているからこそ。毎年、成果をあげており、評価したい。
名児耶委員	B 新規購入は、かなり重要な作品があり充実したと思われる。寄贈、寄託品の受入れも順調。以前にもお願いしたが、既存資料を補填して充実した平常陳列の構築を願います。特に目立つ事業ではないが、着実に文化財を維持していくことは、文化財機構の重要な使命である。
寺崎委員	B 四館ともに計画的、かつ着実に運営されていると考えている。

(2) 展覧事業			
自己点検評価		A (博物館部会委員評価反映)	委員評価 A
河合委員長	委員評価 A	平常展示における各館の工夫と努力の成果が、単に入館者増という一点でなく、観覧者の満足度においても着実に上がっていることを高く評価したい。わたし個人としては、入場者数を意識するとしても、特段特別展に偏ること無く、平常展のさらなる充実が図られることを期待している。さらに、蛇足を恐れず私見を述べるのが許されるなら、外国人入館者の期待するところは特別展ではないからである。	
小笠原委員	A	年度末のコロナ禍の影響があったにもかかわらず、それまでの「国宝 東寺—空海と仏像曼荼羅」等の特別展において多くの来館者があった成果であり、今後は「新常态」対応など大変かと思われるが、さらなる展開を期待したい。	
坂本委員	A	とりわけ平常展の来館者が着実に伸びている点は、今後の博物館活動普及のために意義深い。特別展とセットの入館だけに期待するのではなく、平常展独自のテーマ性、とくにターゲットやタイミングに工夫が凝らされていることを、高く評価したい。	
名児耶委員	A	平常展での入館者の増加が評価できる。特別展も全体に日本文化の原点や基本のものが充実し、意欲的と評価できる。さらに東京国立博物館の特別展開催数の増加も、評価できるが、昨年も述べたように、特別展の回数はもう少し減らして、一つ一つの展示にじっくりと取り組むことも必要かと思う。	
寺崎委員	A	年度末に COVID-19 の影響があったにもかかわらず、平常展・特別展ともに多くの入館者を得た点を高く評価したい。特に平常展が例年以上に増加しているのは、魅力的な特集展示が多かったからではなかろうか。印象に残ったものとして、「京博寄託の名宝」、「版経東漸」(九国博) などがあった。 ただし、今後、外国からの来館者が減少し、さらに平常展の入館料金の値上げが重なると、次年度以降が大いに心配である。	
(3) 教育・普及活動			
自己点検評価		B	委員評価 B
河合委員長	委員評価 B	当初計画の通りの目標をほぼ達成しているものと評価する。美術館・博物館における教育・普及事業は、将来その博物館の命脈をつなぐ鍵となるもいえる。各館はそれを念頭においたであろう、それぞれの創意工夫や努力の跡が認められる。この点に関しては、特に文化財活用センターの今後の動向に注視したい。	
小笠原委員	A	今後ますますオンライン等を活用した教育・普及活動が期待されるが、当年度は目標を上回るアウトプットがあったと思われる。	
坂本委員	B	会員制度について、会員数が伸び悩んでいるのはなぜなのか。課題はさまざまにあるようだが、新しい時代の博物館のありようと合わせて、検討が必要になるのではないか。	
名児耶委員	B	子供向けのギャラリートーク他、各館の取組がかなり成果を挙げきており、A 評価に近いと思うが、さらなる若年対応の発展も考えてほしい。	
寺崎委員	B	各館の努力により、各種講座やプログラムの実施など、所期の目標を達成していると考えられる。	
(4) 有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究			
自己点検評価		B	委員評価 B
河合委員長	委員評価 B	榊原委員の調査研究は博物館活動すべての基礎となるとのコメントに同調する。その上に立って各館は、当初計画に相応の成果をあげているものと評価したい。その成果が研究員の学術的成果や展示、教育普及事業に有効に反映するよう引き続き努められることが望まれる。	
小笠原委員	B	所期の目標を達成している。	
坂本委員	B	特別展「法隆寺金堂壁画と百済観音」が開幕目前にして中止となった。積み重ねてきた金堂壁画関連の調査研究を公開する機会となるはずだただけに残念だ。しかし、これらの研究成果は今後、一層の研究推進に生かすとともに、文化財保護への機運を社会全体で高めるために活用いただけるよう切望する。	
名児耶委員	B	おおむね実績報告書のおりと判断できる。多くの調査報告書の発行など、活発な活動を評価するが、博物館活動での調査研究が、目先の特別展の忙しさのため制限されないことを期待する。とくに、長期保管している文化財のさらなる研究も進めてほしい。	

寺崎委員	B	各館ともに展示業務が多忙な中で、調査研究を着実に継続し、紀要・報告書などに成果を発表している点に敬意を表したい。
(5) 国内外の博物館活動への寄与		
自己点検評価 B 委員評価 B		
河合委員長	委員評価 B	文化財の調査研究、学術交流、有形文化財の貸与、文化財関係事業に関する助言などに、各館それぞれがほぼ当初計画の通りの成果をあげている。奈良博の「令和まほろばプラン」の取り組みは具体性があり理解し易く実現の期待がもてる。また、文化財活用センターにあっては、今後、この項の活動についての具体的かつ明確な計画とその成果の報告が望まれよう。
小笠原委員	B	今後はコロナ禍とそれによるオリパラの開催の可否などの影響が懸念される。今年度は所期の目標を達成したといえる。
坂本委員	B	I COM京都大会の開催は世界の博物館関係者とのネットワークづくりに大きく貢献したと推察する。これを糧として、活動の質と幅を広げることにつなげたい。
名児耶委員	B	おおむね実績報告書のとおり、しっかりと目的を果たしていると思われる。これからも、日本の文化理解のための海外に向けた活動の持続を期待する。日本の文化の理解が世界の人々に日本を理解される早道であるから、極めて重要な活動である。
寺崎委員	B	—
〔研究所・センター業務〕		
2. 文化財及び海外の文化遺産の保護に貢献する調査研究、協力事業等の実施		
(1) 新たな知見の開拓につながる基礎的・探求的な調査研究		
自己点検評価 A 委員評価 A		
河合委員長	委員評価 B	各研究所、センターは、当初の計画通りの成果を上げている。奈良文化財研究所においては、記念物、文化的景観、埋蔵文化財に関する調査研究について、引き続き目標に向かった努力が期待される。
小笠原委員	A	自己点検評価及び部会の各委員の全員の評価どおりとする。
坂本委員	A	—
名児耶委員	A	文化財そのもの、文化財関連で現状を把握調査すべき事柄は多い。現在の各研究所でそれら全てを調査研究することは困難と思われるが、報告される活動報告から見る限り、着実に成果を挙げていると判断できる。ますますの発展を望む。
寺崎委員	A	両研究所ともに大きな成果を挙げているものと評価できる。特に、東文研のデジタル・アーカイブの充実、奈文研による藤原宮大極殿院の発掘調査の新発見などが注目され、引き続き研究を推進してもらいたい。
(2) 科学技術を応用した研究開発の進展等に向けた基盤的な研究		
自己点検評価 A 委員評価 A		
河合委員長	委員評価 B	可搬型分析機械を用いた文化財の素地・構造、及び保存状態に関する調査研究等において顕著な成果を上げていることが認められる。引き続き文化財の保存修復および保存技術の進展に向けた当該研究に対する努力が必要である。
小笠原委員	A	自己点検評価及び部会の各委員の全員の評価どおりとする。 (最新の科学技術を駆使した要素材料や作業技法の開発行為は非常に興味深いと思われた。)
坂本委員	A	毎年、報告書を拜見して、化学や物理などのさまざまな科学的手法が用いられていることに感心する。年輪年代学を同時代性の研究に役立てたり、動物の遺存体を分析して当時の狩猟対象を明らかにしたりといった、生物学的アプローチも興味深い。こうした手法は一部、講演会などでも紹介しておられるようで、ぜひ普及させていただきたい。

名児耶委員	A	活動報告から判断して成果を挙げていると認められる。文化財のために年代測定など、研究の基本となるデータの集積を着実に進めていることは、評価できる。こうしたことの継続が重要であるので、それを維持してほしい。
寺崎委員	A	両研究所ともに、これまで積極的に科学技術を取り入れ、調査研究に応用し、文化財研究を推進してきたが、今年度も十分な実績をあげたものと評価できる。特に、東文研による仏画・仏像に対する光学的調査、奈文研の遺跡・遺物データの計測・記録手法の改良などが注目される。
(3) 文化遺産保護に関する国際協働		
自己点検評価 A 委員評価 A		
河合委員長	委員 評価 B	文化財遺産保護に関する国際情報の収集・研究・発信に顕著な成果を上げていることが認められよう。文化財遺産の保存・修理に関する人材の育成等には、国際協働を堅持し、さらなる成果を上げるよう引き続き努力されることが望まれよう。
小笠原委員	A	自己点検評価及び部会の各委員の全員の評価どおりとする。 (私も委員の方がご指摘された米中の対立などにより政治的経済的な外交が混迷を深めている現代こそ文化による国際交流は意義があると思われる。)
坂本委員	A	ICOM京都大会の開催や、来年に予定されているオリンピック・パラリンピック東京大会2020など、国際的な交流拡大のトレンドに乗じ、国際協働のさらなる前進を望みたい。
名児耶委員	A	ICOMの京都大会への参加や、わが国の修復技術の発信は重要であり、そうした活動の国際協力等、自己評価の通りと思うが、これらに関わる予算が減じられないことを希望する。この活動も、文化財を維持していく上で重要であることは当然だが、やはり継続してほしいし、継続していることで評価されるべきことと思う。
寺崎委員	A	三機関ともに国際協働に取り組み、文化財の調査・修理・保存といった分野で、技術支援・人材育成・情報交換を行っており、そうした成果も着実にあがっているものと判断される。
(4) 文化財に関する情報資料の収集・整備及び調査研究成果の公開・活用		
自己点検評価 A 委員評価 A		
河合委員長	委員 評価 A	文化財に関するデータベースの充実・アーカイブ機能の更新及び拡張に、当初目的以上の顕著な成果を上げていることが評価される。今後とも専門的アーカイブと総合的レファレンスの拡充を期待したい。
小笠原委員	A	自己点検評価及び部会の各委員の全員の評価どおりとする。 (今後はオンライン会議等による密な連携がより重要と思われる。)
坂本委員	A	イベント開催や刊行物の発行に加えて、ウェブサイトやブログの充実、SNSによる情報発信にも取り組んでおられ、スピード感ある公開・活用を目指している点を評価する。
名児耶委員	A	研究の成果の公開と活用は研究所の重要な使命の一つであり、講演会やシンポジウム、印刷物、さらにウェブサイトを通して公開していることが評価できる。これも地道な活動であるが、時には博物館と共同で、若い人も含めた一般への周知活動も考えて良いかと思う。
寺崎委員	A	報告書の刊行、データベースの作成・更新、講演会開催など、限られた人員と予算の中で、十分な成果の公開を行っている判断される。今後も継続して充実をはかってもらいたい。
(5) 地方公共団体等を対象とする文化財に関する研修及び協力等		
自己点検評価 A 委員評価 A		
河合委員長	委員 評価 A	各研究所・センターとも、もてる専門知識を提供することで地方公共団体等に対して、文化財保護と活用に関するナショナルセンターとしての役割を十分に果たしているものと評価できる。自然災害の増加のなかで、被災地、被災機関等に対する救援活動も重要な役割を果たしたことも評価の対象となる。
小笠原委員	A	自己点検評価及び部会の各委員の全員の評価どおりとする。 (地震、風水害等の天災対応の活動は精力的だったと考える。)

坂本委員	A	近年、台風などによる豪雨災害が多発している。今後とも地方公共団体と連携して、文化財の保全や復旧に支援をお願いしたい。
名児耶委員	A	広範囲な研究成果をもとに全国の関係団体への助言については、研究所ならでの基本的活動で、報告通り実施され自己点検評価は妥当である。今後も活動の継続、広がりを目指す。
寺崎委員	A	地方公共団体等に対する研修・助言・調査協力は、順調に進められていると判断される。台風 19 号被害など、大きな災害がおこった時の緊急対応などの点も大いに評価すべきであろう。

【法人共通業務】

Ⅱ 業務運営の効率化に関する目標を達成するためにとるべき措置

自己点検評価 B 委員評価 B

河合委員長	委員評価 B	限られた予算と人材のなかで業務運営の効率化をさらにすすめるには、相当な工夫と努力が必要である。機構内の共通的な事務の一元化による業務の効率化はその一方策として図られて良いと思う。
小笠原委員	B	情報セキュリティの確保・維持、人件費管理や一般管理費の適正化を含む予算執行の効率化、共同調達等の取り組み、メールシステムの統合やクラウド化等の業務の電子化は所期の目標が達成されたほか、契約・調達方法の適正化については、競争性ある契約のシフトで、経費の効率化を達成したことで目標を超えて達成したと思われる。
坂本委員	B	オリパラ東京大会 2020 が延期されたことに伴い、大会そのものも部分的な縮減や見直しが必要になりそうだ。その影響で、機構法人としても対応を迫られる局面があるだろう。適宜適切な対応を望みたい。
名児耶委員	B	予算執行の効率化対策、自己収入拡大へ取組等、目標達成は自己評価通り。ICOM の京都大会は、概ね成功、オリンピック・パラリンピックの延期により来年度に繋がる活動の基盤の構築を期待したい。
寺崎委員	B	計画どおり実施されたものと判断される。

Ⅲ 財務内容の改善に関する目標を達成するためにとるべき措置

自己点検評価 B 委員評価 B

河合委員長	委員評価 A	外部資金の獲得、入場料の増収など自己収入拡大への取り組みは必要であり、相当の成果を上げているものと評価する。保有資産の有効利用の促進も図られるべき今後の課題であろう。
小笠原委員	A	下期末のコロナ禍のなかでも、自己収入が、目標を大きく超えたこと及び前年度を6%以上も上回っていることは特筆すべきことだと思われる。外部資金の確保も前年度を下回るものの、目標を大きく超過している。各種主要業務の取り組みが功を奏した結果が数値に明確に出ているもので高く評価した。
坂本委員	B	計画通りに実行に努め、目標を上回っていることを確認した。新型コロナウイルス感染拡大の今後の財務状況に与える影響について注視していきたい。
名児耶委員	B	予算確保は難しいが、博物館や研究所が国民にとってもっと身近な存在であることを周知させる広報活動などにより、寄付を得やすい状況ができればよいと思う。経営努力目標は評価できるが、数字上 A となることよりも様々な活動を裏付ける予算と人員は確保続けることを期待する。現状維持ができることが一番大切であろう。
寺崎委員	B	—

Ⅳ 予算（人件費の見積もりを含む）、収支計画及び資金計画

自己点検評価 B 委員評価 B

河合委員長	委員評価 B	ナショナルセンターに相応しい優秀な人材の継続的な確保には、それに見合う人件費の確保が不可欠である。その実現には、周到かつ継続的な収支計画と資金計画が必要であり、そのための努力と施策が機構本部には必要となろう。
小笠原委員	B	計画通りの達成と考える。
坂本委員	B	—
名児耶委員	B	経営努力は評価できるが、現状維持ができ、少しずつ拡大することが一番大切であろう。
寺崎委員	B	—

V その他業務運営に関する目標を達成するためにとるべき措置		
自己点検評価 B 委員評価 B		
河合委員長	委員評価 B	IVにも記したように、中長期的な人事計画の策定、能力や適性に応じた採用と適材適所を旨とした人事の実施が必要である。ことに専門性の高い研究職員には、仕事の継続性に対する配慮が必要である。
小笠原委員	B	内部統制面においてや施設整備及び情報セキュリティにおいても堅実に業務遂行がなされていると思われる。人事も採用及び運用（ダイバーシティやリテンションのための研修等）の両面において所定の目標を達成していると思われる。
坂本委員	B	デジタル人材の育成や交流は大きな課題。関連機関との連携等もふくめて検討してほしい。
名児耶委員	B	リスク管理、情報セキュリティシステムの管理等の対策を評価。もっと開かれた施設として認知される努力も望みたい。
寺崎委員	B	—
その他（総合的な事項、自己点検評価について等）		
河合委員長		毎年コメントすることではあるが、限られた資金と人材によるなかで、職員の持てる力と努力によって、第4期中期目標・計画をほぼ満たすに足る相当の成果を上げていることを改めて評価したい。ただ、博物館部会と研究所センター部会での評価・評定基準に些かのズレがあるのが個人的には気になることである。また、研究所部会の寺崎部会長が指摘するように、「総会・部会の開催方式が変わり、特に研究所・センター部会委員（博物館部会も同様）が総会に参加できなくなったことに異論が多く出された」と言う点に関しての「開催方法」についての検討は、いま一度なされる必要もあろうかと思われるので、本部におかれては議論されたい。いずれにせよ、万一再検討がなされたなら、その結果は各委員に周知する必要があるだろう。
小笠原委員		特にありませんが、以前から指摘のとおり、自己点検評価作業のより簡素化をできる範囲で行い、業務負担を軽減化していただいたほうがよろしいかと考える。
坂本委員		この数カ月間、オンライン展示が世界中に普及し、東博のインスタグラムにも充実したコンテンツが発信されていたことを評価する。とはいえ、リアル展示の価値が軽減することはなく、むしろリアルだからこそその価値が再評価される気配もある。いかに高価値を提供できるかという点に、機構の可能性もかかっている。ぜひ大きな目で将来の展開を構想していただきたい。 平常展の料金を4月から引き上げた。新型コロナウイルス感染拡大と時期が重なり、いまだに周知も不十分かとは思いますが、値上げによる影響はしっかりとフォローをお願いしたい。そのうえでクラウドファンディングやふるさと納税などに代表される新しいミュージアムファンディングの仕組みを模索していただきたい。
名児耶委員		博物館、研究所の活動を、もっと一般に認知されるためのわかりやすい展示、普及活動と専門家、研究者や多くの博物館施設を牽引する活動を期待する。 また前回にも述べたが、現在の状況は、活動の幅が広く、職員がギリギリの状態に対応しているように感じられる。もっと人員、予算に余裕があるよう状況で、運営されることで、より一般人に共感をよぶ活動が生まれるのではないかと考える。
寺崎委員		各機関ともに広範囲で高度な内容の調査・研究・普及活動を展開し、その成果は極めて高く評価すべきであるが、それらの多くは個々の職員の非常な努力によって支えられているように思われる。予算・人員の慢性的不足は限界に近づいているのではなかろうか。個人的には、運営交付金の増加が望めないのであれば、業務の見直し・縮小も検討してゆく必要があるのではないかと考える。 最後に、研究所・センター部会委員より、①外部評価委員会の総会および部会の開催方式について引き続き検討してもらいたいこと、②IRCIの人員・予算の充実を求める意見、がともに複数出されたことを付言する。

独立行政法人国立文化財機構外部評価委員評価書（総会）

外部評価委員名 河合 正朝		※国立文化財機構の自己点検評価と異なる評価をされる場合は「委員評価」欄に評価※（参考参照）をご記入いただき、必ずコメントをご記入願います。 また、異なる場合でもコメントがございましたらご記入願います。			
全体評価	28年度	29年度	30年度	元年度	2年度
	B	B	B	B	—
【委員コメント】 評価すべき全項目にわたって所期の目標をほぼ達成している。有形文化財の収集、管理については着実に努力の成果が上がっていることが認められ、展覧会事業においては平常展に安定した観覧者の増加が認められることは特に評価したい。外部資金の導入については引き続き工夫と努力のあることを期待する。調査研究に顕著の成果が認められるが、その成果を日常の展示（特別展を含む）や教育普及活動等の場に反映することが期待される。事務の効率化をすすめることに努めるとともに、増員を含めた常勤研究職員の安定した確保のための人件費の継続的な獲得には特段の努力を願いたい。後継者養成を一つの使命とするナショナルセンターとしてしての当機構博物館・研究所には、それがいわば責務であると考えられる故である。					
I 国民に対して提供するサービスその他業務の質の向上に関する目標を達成するためにとるべき措置					
〔博物館業務〕 自己点検評価 B 部会評価 B					
1. 有形文化財の保存と継承並びに有形文化財を活用した歴史・伝統文化の国内外への発信					
(1) 有形文化財の収集・保管、次代への継承					
自己点検評価 B	委員評価 B	【委員コメント】 第四期中期目標に基づき当該項目の計画はほぼ達成したものと評価する。各委員からのコメントにも文化財の購入、寄贈、寄託の推進に引き続き務めることが望まれている。ここにいま一つ提言すれば、美術品の美術館・博物館における公開の促進に関する法律に基づく登録美術品制度の周知とその活用に一層の努力をされたいのである。			
(2) 展覧事業					
A (部会評価を反映)	委員評価 A	【委員コメント】 平常展示における各館の工夫と努力の成果が、単に入館者増という一点でなく、観覧者の満足度においても着実に上がっていることを高く評価したい。わたし個人としては、入場者数を意識するとしても、特段特別展に偏ること無く、平常展のさらなる充実が図られることを期待している。さらに、蛇足を恐れず私見を述べるものが許されるなら、外国人入館者の期待するところは特別展ではないからである。			
(3) 教育・普及活動					
B	委員評価 B	【委員コメント】 当初計画の通りの目標をほぼ達成しているものと評価する。美術館・博物館における教育・普及事業は、将来その博物館の命脈をつなぐ鍵となるもいえる。各館はそれを念頭においたであろう、それぞれの創意工夫や努力の跡が認められる。この点に関しては、特に文化財活用センターの今後の動向に注視したい。			
(4) 有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究					
B	委員評価 B	【委員コメント】 榊原委員の調査研究は博物館活動すべての基礎となるとのコメントに同調する。その上立って各館は、当初計画に相応の成果をあげているものと評価したい。その成果が研究員の学術的成果や展示、教育普及事業に有効に反映するよう引き続き努められることが望まれる。			

(5) 国内外の博物館活動への寄与		
B	委員評価	【委員コメント】
	B	文化財の調査研究、学术交流、有形文化財の貸与、文化財関係事業に関する助言などに、各館それぞれがほぼ当初計画の通りの成果をあげている。奈良博の「令和まほろばプラン」の取り組みは具体性があり理解し易く実現の期待がもてる。また、文化財活用センターにあっては、今後、この項の活動についての具体的かつ明確な計画とその成果の報告が望まれよう。
〔研究所・センター業務〕 自己点検評価 A 部会評価 A		
2. 文化財及び海外の文化遺産の保護に貢献する調査研究、協力事業等の実施		
(1) 新たな知見の開拓につながる基礎的・探求的な調査研究		
A	委員評価	【委員コメント】
	B	各研究所、センターは、当初の計画通りの成果を上げている。奈良文研においては、記念物、文化的景観、埋蔵文化財に関する調査研究について、引き続き目標に向けた努力が期待される。
(2) 科学技術を応用した研究開発の進展等に向けた基盤的な研究		
A	委員評価	【委員コメント】
	B	可搬型分析機械を用いた文化財の素地・構造、及び保存状態に関する調査研究等において顕著な成果を上げていることが認められる。引き続き文化財の保存修復および保存技術の進展に向けた当該研究に対する努力が必要である。
(3) 文化遺産保護に関する国際協働		
A	委員評価	【委員コメント】
	B	文化財遺産保護に関する国際情報の収集・研究・発信に顕著な成果を上げていることが認められよう。文化財遺産の保存・修理に関する人材の育成等には、国際協働を堅持し、さらなる成果を上げるよう引き続き努力されることが望まれよう。
(4) 文化財に関する情報資料の収集・整備及び調査研究成果の公開・活用		
A	委員評価	【委員コメント】
	A	文化財に関するデータベースの充実・アーカイブ機能の更新及び拡張に、当初目的以上の顕著な成果を上げていることが評価される。今後とも専門的アーカイブと総合的レファレンスの拡充を期待したい。
(5) 地方公共団体等を対象とする文化財に関する研修及び協力等		
A	委員評価	【委員コメント】
	A	各研究所・センターとも、もてる専門知識を提供することで地方公共団体等に対して、文化財保護と活用に関するナショナルセンターとしての役割を十分に果たしているものと評価できる。自然災害の増加のなかで、被災地、被災機関等に対する救援活動も重要な役割を果たしたことも評価の対象となる。
〔法人共通業務〕		
II 業務運営の効率化に関する目標を達成するためにとるべき措置		
B	委員評価	【委員コメント】
	B	限られた予算と人材のなかで業務運営の効率化をさらにすすめるには、相当な工夫と努力が必要である。機構内の共通的な事務の一元化による業務の効率化はその一方策として図られて良いと思う。

Ⅲ 財務内容の改善に関する目標を達成するためにとるべき措置		
B	委員評価	【委員コメント】
	A	外部資金の獲得、入場料の増収など自己収入拡大への取り組みは必要であり、相当の成果を上げているものと評価する。保有資産の有効利用の促進も図られるべき今後の課題であろう。
Ⅳ 予算（人件費の見積もりを含む）、収支計画及び資金計画		
B	委員評価	【委員コメント】
	B	ナショナルセンターに相応しい優秀な人材の継続的な確保には、それに見合う人件費の確保が不可欠である。その実現には、周到かつ継続的な収支計画と資金計画が必要であり、そのための努力と施策が機構本部には必要となろう。
Ⅴ その他業務運営に関する目標を達成するためにとるべき措置		
B	委員評価	【委員コメント】
	B	Ⅳにも記したように、中長期的な人事計画の策定、能力や適性に応じた採用と適材適所を旨とした人事の実施が必要である。ことに専門性の高い研究職員には、仕事の継続性に対する配慮が必要である。
その他（総合的な事項、自己点検評価について等）		
<p>【委員コメント】</p> <p>毎年コメントすることではあるが、限られた資金と人材によるなかで、職員の持てる力と努力によって、第4期中期目標・計画をほぼ満たすに足る相当の成果を上げていることを改めて評価したい。ただ、博物館部会と研究所センター部会での評価・評定基準に些かのズレがあるのが個人的には気になることである。また、研究所部会の寺崎部会長が指摘するように、「総会・部会の開催方式が変わり、特に研究所・センター部会委員（博物館部会も同様）が総会に参加できなくなったことに異論が多く出された」と言う点に関しての「開催方法」についての検討は、いま一度なされる必要もあろうかと思われるので、本部におかれては議論されたい。いずれにせよ、万一再検討がなされたなら、その結果は各委員に周知する必要があるだろう。</p>		

(参考)

【年度計画に対する総合評価】

評価は以下の評定区分を使用している。

- | |
|--|
| <p>S：所期の目標を量的及び質的に上回る顕著な成果が得られている</p> <p>A：所期の目標を上回る成果が得られている</p> <p>B：所期の目標を達成している※</p> <p>C：所期の目標を下回っており、改善を要する</p> <p>D：所期の目標を下回っており、業務の廃止を含めた抜本的な改善を要する</p> <p>※B評定が標準となる</p> |
|--|

独立行政法人国立文化財機構外部評価委員評価書（総会）

外部評価委員名 小笠原 直		※国立文化財機構の自己点検評価と異なる評価をされる場合は「委員評価」欄に評価※（参考参照）をご記入いただき、必ずコメントをご記入願います。 また、異なる場合でもコメントがございましたらご記入願います。			
全体評価	28年度	29年度	30年度	元年度	2年度
	B	B	B	B	—
【委員コメント】 私自身は、下記のとおり、単純にAが8個でBの6個を上回っており、総合的にはAだと思われる。年度末近くにコロナ禍があったにもかかわらず、展覧収入等の自己収入の確保が目標比及び前年比達成している点及び有形文化財に関する教育・普及活動に一定以上の成果があったことを高く評価したい。					
I 国民に対して提供するサービスその他業務の質の向上に関する目標を達成するためにとるべき措置					
〔博物館業務〕 自己点検評価 B 部会評価 B					
1. 有形文化財の保存と継承並びに有形文化財を活用した歴史・伝統文化の国内外への発信					
(1) 有形文化財の収集・保管、次代への継承					
自己点検評価 B	委員評価 B	【委員コメント】 新規購入や譲受等の収集及びその保管は非常に地道な作業であるかと思われるが、所期の目標を達成していると思われる。			
(2) 展覧事業					
A (部会評価を反映)	委員評価 A	【委員コメント】 年度末のコロナ禍の影響があったにもかかわらず、それまでの「国宝 東寺—空海と仏像曼荼羅」等の特別展において多くの来館者があった成果であり、今後は「新常态」対応など大変かと思われるが、さらなる展開を期待したい。			
(3) 教育・普及活動					
B	委員評価 A	【委員コメント】 今後ますますオンライン等を活用した教育・普及活動が期待されるが、当年度は目標を上回るアウトプットがあったと思われる。			
(4) 有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究					
B	委員評価 B	【委員コメント】 所期の目標を達成している。			

(5) 国内外の博物館活動への寄与		
B	委員評価	【委員コメント】
	B	今後はコロナ禍とそれによるオリパラの開催の可否などの影響が懸念される。今年度は所期の目標を達成したといえる。
〔研究所・センター業務〕 自己点検評価 A 部会評価 A		
2. 文化財及び海外の文化遺産の保護に貢献する調査研究、協力事業等の実施		
(1) 新たな知見の開拓につながる基礎的・探求的な調査研究		
A	委員評価	【委員コメント】
	A	自己点検評価及び部会の各委員の全員の評価どおりとする。
(2) 科学技術を応用した研究開発の進展等に向けた基盤的な研究		
A	委員評価	【委員コメント】
	A	自己点検評価及び部会の各委員の全員の評価どおりとする。 (最新の科学技術を駆使した要素材料や作業技法の開発行為は非常に興味深いと思われた。)
(3) 文化遺産保護に関する国際協働		
A	委員評価	【委員コメント】
	A	自己点検評価及び部会の各委員の全員の評価どおりとする。 (私も委員の方がご指摘された米中の対立などにより政治的経済的な外交が混迷を深めている現代こそ文化による国際交流は意義があると思われる。)
(4) 文化財に関する情報資料の収集・整備及び調査研究成果の公開・活用		
A	委員評価	【委員コメント】
	A	自己点検評価及び部会の各委員の全員の評価どおりとする。 (今後はオンライン会議等による密な連携がより重要と思われる。)
(5) 地方公共団体等を対象とする文化財に関する研修及び協力等		
A	委員評価	【委員コメント】
	A	自己点検評価及び部会の各委員の全員の評価どおりとする。 (地震、風水害等の天災対応の活動は精力的だったと考える。)

〔法人共通業務〕

Ⅱ 業務運営の効率化に関する目標を達成するためにとるべき措置

B	委員評価	【委員コメント】
	B	情報セキュリティの確保・維持、人件費管理や一般管理費の適正化を含む予算執行の効率化、共同調達等の取り組み、メールシステムの統合やクラウド化等の業務の電子化は所期の目標が達成されたほか、契約・調達方法の適正化については、競争性ある契約のシフトで、経費の効率化を達成したことで目標を超えて達成したと思われる。

Ⅲ 財務内容の改善に関する目標を達成するためにとるべき措置

B	委員評価	【委員コメント】
	A	下期末のコロナ禍のなかでも、自己収入が、目標を大きく超えたこと及び前年度を6%以上も上回っていることは特筆すべきことだと思われる。外部資金の確保も前年度を下回るものの、目標を大きく超過している。各種主要業務の取り組みが功を奏した結果が数値に明確に出ているもので高く評価した。

Ⅳ 予算（人件費の見積もりを含む）、収支計画及び資金計画

B	委員評価	【委員コメント】
	B	計画通りの達成と考える。

Ⅴ その他業務運営に関する目標を達成するためにとるべき措置

B	委員評価	【委員コメント】
	B	内部統制面においてや施設整備及び情報セキュリティにおいても堅実に業務遂行がなされていると思われる。人事も採用及び運用（ダイバーシティやリテンションのための研修等）の両面において所定の目標を達成していると思われる。

その他（総合的な事項、自己点検評価について等）

【委員コメント】
特にありませんが、以前から指摘のとおり、自己点検評価作業のより簡素化をできる範囲で行い、業務負担を軽減化していただいたほうがよろしいかと考える。

（参考）

【年度計画に対する総合評価】

評価は以下の評定区分を使用している。

- S：所期の目標を量的及び質的に上回る顕著な成果が得られている
 - A：所期の目標を上回る成果が得られている
 - B：所期の目標を達成している※**
 - C：所期の目標を下回っており、改善を要する
 - D：所期の目標を下回っており、業務の廃止を含めた抜本的な改善を要する
- ※B評定が標準となる

独立行政法人国立文化財機構外部評価委員評価書（総会）

外部評価委員名 坂本 弘子		※国立文化財機構の自己点検評価と異なる評価をされる場合は「委員評価」欄に評価※（参考参照）をご記入いただき、必ずコメントをご記入願います。 また、異なる場合でもコメントがございましたらご記入願います。			
全体評価	28年度	29年度	30年度	元年度	2年度
	B	B	B	B	—
【委員コメント】 特別展を密にすることによって博物館事業の収益性を高めてきたが、新型コロナウイルス感染拡大によって「新しい生活様式」が求められるなか、展覧会の事業計画や業績評価をどうするのか、根本から考え直す必要があるようだ。しかし一方で、諸外国と比較して国の文化政策や文化活動への支援はそもそも手厚いとはいえ、今春には入場料金を値上げして来場者の負担増に頼る形に至っている。これから先、ますます経済活動が優先されて文化が後回しになる可能性さえあり、機構としても、after コロナあるいはwith コロナ時代の新しい役割を、関連機関と連携して打ち出していきたい。					
I 国民に対して提供するサービスその他業務の質の向上に関する目標を達成するためにとるべき措置					
【博物館業務】 自己点検評価 B 部会評価 B					
1. 有形文化財の保存と継承並びに有形文化財を活用した歴史・伝統文化の国内外への発信					
(1) 有形文化財の収集・保管、次代への継承					
自己点検評価	委員評価	【委員コメント】 文化財の収集活動は、歴代の担当者や所蔵家との長年の信頼関係が各館に受け継がれているからこそ。毎年、成果をあげており、評価したい。			
B					
(2) 展覧事業					
A <small>(部会評価を反映)</small>	委員評価	【委員コメント】 とりわけ平常展の来館者が着実に伸びている点は、今後の博物館活動普及のために意義深い。特別展とセットの入館だけに期待するのではなく、平常展独自のテーマ性、とくにターゲットやタイミングに工夫が凝らされていることを、高く評価したい。			
(3) 教育・普及活動					
B	委員評価	【委員コメント】 会員制度について、会員数が伸び悩んでいるのはなぜなのか。課題はさまざまにあるようだが、新しい時代の博物館のありようと合わせて、検討が必要になるのではないか。			
(4) 有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究					
B	委員評価	【委員コメント】 特別展「法隆寺金堂壁画と百済観音」が開幕目前にして中止となった。積み重ねてきた金堂壁画関連の調査研究を公開する機会となるはずだっただけに残念だ。しかし、これらの研究成果は今後、一層の研究推進に生かすとともに、文化財保護への機運を社会全体で高めるために活用いただけるよう切望する。			

(5) 国内外の博物館活動への寄与		
B	委員評価	【委員コメント】 I COM京都大会の開催は世界の博物館関係者とのネットワークづくりに大きく貢献したと推察する。これを糧として、活動の質と幅を広げることに繋がりたい。
〔研究所・センター業務〕 自己点検評価 A 部会評価 A		
2. 文化財及び海外の文化遺産の保護に貢献する調査研究、協力事業等の実施		
(1) 新たな知見の開拓につながる基礎的・探求的な調査研究		
A	委員評価	【委員コメント】
(2) 科学技術を応用した研究開発の進展等に向けた基盤的な研究		
A	委員評価	【委員コメント】 毎年、報告書を拝見して、化学や物理などのさまざまな科学的手法が用いられていることに感心する。年輪年代学を同時代性の研究に役立てたり、動物の遺存体を分析して当時の狩猟対象を明らかにしたりといった、生物学的アプローチも興味深い。こうした手法は一部、講演会などでも紹介しておられるようで、ぜひ普及させていただきたい。
(3) 文化遺産保護に関する国際協働		
A	委員評価	【委員コメント】 I COM京都大会の開催や、来年に予定されているオリンピック・パラリンピック東京大会 2020 など、国際的な交流拡大のトレンドに乗じ、国際協働のさらなる前進を望みたい。
(4) 文化財に関する情報資料の収集・整備及び調査研究成果の公開・活用		
A	委員評価	【委員コメント】 イベント開催や刊行物の発行に加えて、ウェブサイトやブログの充実、SNSによる情報発信にも取り組んでおられ、スピード感ある公開・活用を目指している点を評価する。
(5) 地方公共団体等を対象とする文化財に関する研修及び協力等		
A	委員評価	【委員コメント】 近年、台風などによる豪雨災害が多発している。今後とも地方公共団体と連携して、文化財の保全や復旧に支援をお願いしたい。
〔法人共通業務〕		
Ⅱ 業務運営の効率化に関する目標を達成するためにとるべき措置		
B	委員評価	【委員コメント】 オリパラ東京大会 2020 が延期されたことに伴い、大会そのものも部分的な縮減や見直しが必要になりそう。その影響で、機構法人としても対応を迫られる局面があるだろう。適宜適切な対応を望みたい。

Ⅲ 財務内容の改善に関する目標を達成するためにとるべき措置		
B	委員評価	【委員コメント】 計画通りに実行に努め、目標を上回っていることを確認した。新型コロナウイルス感染拡大の今後の財務状況に与える影響について注視していきたい。
Ⅳ 予算（人件費の見積もりを含む）、収支計画及び資金計画		
B	委員評価	【委員コメント】
Ⅴ その他業務運営に関する目標を達成するためにとるべき措置		
B	委員評価	【委員コメント】 デジタル人材の育成や交流は大きな課題。関連機関との連携等もふくめて検討してほしい。
その他（総合的な事項、自己点検評価について等）		
<p>【委員コメント】</p> <p>★この数カ月間、オンライン展示が世界中に普及し、東博のInstagramにも充実したコンテンツが発信されていたことを評価する。とはいえ、リアル展示の価値が軽減することではなく、むしろリアルだからその価値が再評価される気配もある。いかに高価値を提供できるかという点に、機構の可能性もかかっている。ぜひ大きな目で将来の展開を構想していただきたい。</p> <p>★平常展の料金を4月から引き上げた。新型コロナウイルス感染拡大と時期が重なり、いまだに周知も不十分かと思うが、値上げによる影響はしっかりとフォローをお願いしたい。そのうえでクラウドファンディングやふるさと納税などに代表される新しいミュージアムファンディングの仕組みを模索していただきたい。</p>		

(参考)

【年度計画に対する総合評価】

評価は以下の評定区分を使用している。

- | |
|--|
| <p>S：所期の目標を量的及び質的に上回る顕著な成果が得られている</p> <p>A：所期の目標を上回る成果が得られている</p> <p>B：所期の目標を達成している※</p> <p>C：所期の目標を下回っており、改善を要する</p> <p>D：所期の目標を下回っており、業務の廃止を含めた抜本的な改善を要する</p> <p>※B評定が標準となる</p> |
|--|

独立行政法人国立文化財機構外部評価委員評価書（総会）

外部評価委員名 名児耶 明		※国立文化財機構の自己点検評価と異なる評価をされる場合は「委員評価」欄に評価※（参考参照）をご記入いただき、必ずコメントをご記入願います。 また、異なる場合でもコメントがございましたらご記入願います。			
全体評価	28年度	29年度	30年度	元年度	2年度
	B	B	B	B	—
【委員コメント】 全体として、年度末のコロナウィルス騒動の影響をあまり感じさせず、昨年同様に運営、活動は一定の成果を維持していたと評価できる。こうした状況を維持することが重要だが、コロナウィルス騒動への対策等、これからは、日常的業務の中でも異常事態への対応のあり方も検討しなければならないと思う。地道な活動を維持するための人材や予算の確保についての努力も続けてもらいたい。					
I 国民に対して提供するサービスその他業務の質の向上に関する目標を達成するためにとるべき措置					
【博物館業務】 自己点検評価 B 部会評価 B					
1. 有形文化財の保存と継承並びに有形文化財を活用した歴史・伝統文化の国内外への発信					
(1) 有形文化財の収集・保管、次代への継承					
自己点検 評価 B	委員評価	【委員コメント】 新規購入は、かなり重要な作品があり充実したと思われる。寄贈、寄託品の受入れも順調。以前にもお願いしたが、既存資料を補填して充実した平常陳列の構築を願います。特に目立つ事業ではないが、着実に文化財を維持していくことは、文化財機構の重要な使命である。			
(2) 展覧事業					
A (部会評価を反映)	委員評価	【委員コメント】 平常点での入館者の増加が評価できる。特別展も全体に日本文化の原点や基本のものが充実し、意欲的と評価できる。さらに東京国立博物館の特別展開催催数の増加も、評価できるが、昨年も述べたように、特別展の回数はもう少し減らして、一つ一つの展示にじっくりと取り組むことも必要かと思う。			
(3) 教育・普及活動					
B	委員評価	【委員コメント】 子供向けのギャラリートーク他、各館の取組がかなり成果を挙げきており、A評価に近いと思うが、さらなる若年対応の発展も考えてほしい。			
(4) 有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究					
B	委員評価	【委員コメント】 おおむね実績報告書のとおりと判断できる。多くの調査報告書の発行など、活発な活動を評価するが、博物館活動での調査研究が、目先の特別展の忙しさのため制限されないことを期待する。とくに、長期保管している文化財のさらなる研究も進めてほしい。			
(5) 国内外の博物館活動への寄与					
B	委員評価	【委員コメント】 おおむね実績報告書のとおり、しっかりと目的を果たしていると思われる。これからも、日本の文化理解のための海外に向けた活動の持続を期待する。日本の文化の理解が世界の人々に日本を理解される早道であるから、極めて重要な活動である。			

〔研究所・センター業務〕 自己点検評価 A 部会評価 A		
2. 文化財及び海外の文化遺産の保護に貢献する調査研究、協力事業等の実施		
(1) 新たな知見の開拓につながる基礎的・探求的な調査研究		
A	委員評価	【委員コメント】 文化財そのもの、文化財関連で現状を把握調査すべき事柄は多い。現在の各研究所でそれら全てを調査研究することは困難と思われるが、報告される活動報告から見る限り、着実に成果を挙げていると判断できる。ますますの発展を望む。
(2) 科学技術を応用した研究開発の進展等に向けた基盤的な研究		
A	委員評価	【委員コメント】 活動報告から判断して成果を挙げていると認められる。文化財のために年代測定など、研究の基本となるデータの集積を着実に進めていることは、評価できる。こうしたことの継続が重要であるので、それを維持してほしい。
(3) 文化遺産保護に関する国際協働		
A	委員評価	【委員コメント】 ICOMの京都大会への参加や、わが国の修復技術の発信は重要であり、そうした活動の国際協力等、自己評価の通りと思うが、これらに関わる予算が減じられないことを希望する。この活動も、文化財を維持していく上で重要であることは当然だが、やはり継続してほしいし、継続していることで評価されるべきことと思う。
(4) 文化財に関する情報資料の収集・整備及び調査研究成果の公開・活用		
A	委員評価	【委員コメント】 研究の成果の公開と活用は研究所の重要な使命の一つであり、講演会やシンポジウム、印刷物、さらにウェブサイトを通して公開していることが評価できる。これも地道な活動であるが、時には博物館と共同で、若い人も含めた一般への周知活動も考えて良いかと思う。
(5) 地方公共団体等を対象とする文化財に関する研修及び協力等		
A	委員評価	【委員コメント】 広範囲な研究成果をもとに全国の関係団体への助言については、研究所ならでの基本的活動で、報告通り実施され自己点検評価は妥当である。 今後も活動の継続、広がりを目指す。
〔法人共通業務〕		
II 業務運営の効率化に関する目標を達成するためにとるべき措置		
B	委員評価	【委員コメント】 予算執行の効率化対策、自己収入拡大へ取組等、目標達成は自己評価通り。 ICOMの京都大会は、概ね成功、オリンピック・パラリンピックの延期により来年度に繋がる活動の基盤の構築を期待したい。
III 財務内容の改善に関する目標を達成するためにとるべき措置		
B	委員評価	【委員コメント】 予算確保は難しいが、博物館や研究所が国民にとってもっと身近な存在であることを周知させる広報活動などにより、寄付を得やすい状況ができればよいと思う。経営努力目標は評価できるが、数字上Aとなることよりも様々な活動を裏付ける予算と人員は確保続けることを期待する。現状維持ができることが一番大切であろう

Ⅳ 予算（人件費の見積もりを含む）、収支計画及び資金計画		
B	委員評価	【委員コメント】 経営努力は評価できるが、現状維持ができ、少しずつ拡大することが一番大切であろう。
Ⅴ その他業務運営に関する目標を達成するためにとるべき措置		
B	委員評価	【委員コメント】 リスク管理、情報セキュリティーシステムの管理等の対策を評価。もっと開かれた施設として認知される努力も望みたい。
その他（総合的な事項、自己点検評価について等）		
【委員コメント】 博物館、研究所の活動を、もっと一般に認知されるためのわかりやすい展示、普及活動と専門家、研究者や多くの博物館施設を牽引する活動を期待する。 また前回にも述べたが、現在の状況は、活動の幅が広く、職員がギリギリの状態に対応しているように感じられる。もっと人員、予算に余裕があるよう状況で、運営されることで、より一般人に共感をよぶ活動が生まれるのではないかと考える。		

（参考）

【年度計画に対する総合評価】

評価は以下の評定区分を使用している。

- S：所期の目標を量的及び質的に上回る顕著な成果が得られている
A：所期の目標を上回る成果が得られている
B：所期の目標を達成している※
C：所期の目標を下回っており、改善を要する
D：所期の目標を下回っており、業務の廃止を含めた抜本的な改善を要する
※B評定が標準となる

独立行政法人国立文化財機構外部評価委員評価書（総会）

外部評価委員名 寺崎 保広		※国立文化財機構の自己点検評価と異なる評価をされる場合は「委員評価」欄に評価※（参考参照）をご記入いただき、必ずコメントをご記入願います。 また、異なる場合でもコメントがございましたらご記入願います。			
全体評価	28年度	29年度	30年度	元年度	2年度
	B	B	B	B	—
【委員コメント】 全体として、所期の目標を十分に達成していると考えます。					
I 国民に対して提供するサービスその他業務の質の向上に関する目標を達成するためにとるべき措置					
〔博物館業務〕 自己点検評価 B 部会評価 B					
1. 有形文化財の保存と継承並びに有形文化財を活用した歴史・伝統文化の国内外への発信					
(1) 有形文化財の収集・保管、次代への継承					
自己点検評価 B	委員評価	【委員コメント】 四館ともに計画的、かつ着実に運営されていると考える。			
(2) 展覧事業					
A <small>(部会評価を反映)</small>	委員評価	【委員コメント】 年度末に COVID-19 の影響があったにもかかわらず、平常展・特別展ともに多くの入館者を得た点を高く評価したい。特に平常展が例年以上に増加しているのは、魅力的な特集展示が多かったからではなかろうか。印象に残ったものとして、「京博寄託の名宝」、「版経東漸」（九国博）などがあった。 ただし、今後、外国からの来館者が減少し、さらに平常展の入館料金の値上げが重なると、次年度以降が大いに心配である。			
(3) 教育・普及活動					
B	委員評価	【委員コメント】 各館の努力により、各種講座やプログラムの実施など、所期の目標を達成していると考えます。			
(4) 有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究					
B	委員評価	【委員コメント】 各館ともに展示業務が多忙な中で、調査研究を着実に継続し、紀要・報告書などに成果を発表している点に敬意を表したい。			
(5) 国内外の博物館活動への寄与					
B	委員評価	【委員コメント】			

〔研究所・センター業務〕 自己点検評価 A 部会評価 A		
2. 文化財及び海外の文化遺産の保護に貢献する調査研究、協力事業等の実施		
(1) 新たな知見の開拓につながる基礎的・探求的な調査研究		
A	委員評価	【委員コメント】 両研究所ともに大きな成果を挙げているものと評価できる。特に、東文研のデジタル・アーカイブの充実、奈文研による藤原宮大極殿院の発掘調査の新発見などが注目され、引き続き研究を推進してもらいたい。
(2) 科学技術を応用した研究開発の進展等に向けた基盤的な研究		
A	委員評価	【委員コメント】 両研究所ともに、これまで積極的に科学技術を取り入れ、調査研究に応用し、文化財研究を推進してきたが、今年度も十分な実績をあげたものと評価できる。特に、東文研による仏画・仏像に対する光学的調査、奈文研の遺跡・遺物データの計測・記録手法の改良などが注目される。
(3) 文化遺産保護に関する国際協働		
A	委員評価	【委員コメント】 三機関ともに国際協働に取り組み、文化財の調査・修理・保存といった分野で、技術支援・人材育成・情報交換を行っており、そうした成果も着実にあがっているものと判断される。
(4) 文化財に関する情報資料の収集・整備及び調査研究成果の公開・活用		
A	委員評価	【委員コメント】 報告書の刊行、データベースの作成・更新、講演会開催など、限られた人員と予算の中で、十分な成果の公開を行っているとは判断される。今後も継続して充実をはかってもらいたい。
(5) 地方公共団体等を対象とする文化財に関する研修及び協力等		
A	委員評価	【委員コメント】 地方公共団体等に対する研修・助言・調査協力は、順調に進められていると判断される。台風 19 号被害など、大きな災害がおこった時の緊急対応などの点も大いに評価すべきであろう。
〔法人共通業務〕		
Ⅱ 業務運営の効率化に関する目標を達成するためにとるべき措置		
B	委員評価	【委員コメント】 計画どおり実施されたものと判断される。
Ⅲ 財務内容の改善に関する目標を達成するためにとるべき措置		
B	委員評価	【委員コメント】

IV 予算（人件費の見積もりを含む）、収支計画及び資金計画		
B	委員評価	【委員コメント】
V その他業務運営に関する目標を達成するためにとるべき措置		
B	委員評価	【委員コメント】
その他（総合的な事項、自己点検評価について等）		
<p>【委員コメント】</p> <p>各機関ともに広範囲で高度な内容の調査・研究・普及活動を展開し、その成果は極めて高く評価すべきであるが、それらの多くは個々の職員の非常な努力によって支えられているように思われる。予算・人員の慢性的不足は限界に近づいているのではなかろうか。個人的には、運営交付金の増加が望めないのであれば、業務の見直し・縮小も検討してゆく必要があるのではないかと考える。</p> <p>最後に、研究所・センター部会委員より、①外部評価委員会の総会および部会の開催方式について引き続き検討してもらいたいこと、②IRCIの人員・予算の充実を求める意見、がともに複数出されたことを付言する。</p>		

（参考）

【年度計画に対する総合評価】

評価は以下の評定区分を使用している。

- S：所期の目標を量的及び質的に上回る顕著な成果が得られている
A：所期の目標を上回る成果が得られている
B：所期の目標を達成している※
C：所期の目標を下回っており、改善を要する
D：所期の目標を下回っており、業務の廃止を含めた抜本的な改善を要する
※B評定が標準となる

独立行政法人国立文化財機構外部評価委員会評価報告書

—令和元年度—

博物館部会

独立行政法人国立文化財機構外部評価委員会

独立行政法人国立文化財機構外部評価委員会評価書（博物館部会）

まとめ

自己点検評価 B 委員評価 B

1. 有形文化財の保存と継承並びに有形文化財を活用した歴史・伝統文化の国内外への発信		
(1) 有形文化財の収集・保管、次代への継承		
自己点検評価 B 委員評価 B		
名児耶 部会長	委員 評価 B	報告の通りと判断できる。新規購入や寄贈、寄託品の受入れも順調と判断できる。特に目立つ事業ではないが、着実にわが国の文化財を維持していくことは、文化財機構の最重要な使命である。
浜田 副部会長	B	国立博物館は、地方の文化財が海外や民間へ流出することを防ぎ、国の宝を守るため、従来にも増して、購入を含む積極的な資料収集を進める必要に迫られていると考える。今後も、相応の資料収集のための予算確保とともに、収蔵スペースと収蔵環境の確保にも務めていただきたい。
小松委員	B	
榊原委員	A	各館限られた予算の中でよく収集の実を上げたと評価したい。その収集の方法として改めて寄託の充実を図りたい。購入となると所蔵者の事情もあった実現が難しいこともあるだろうが、寄託ならばそのハードルも低いからである。今回東京国立博物館が購入した浜松図屏風も、京都国立博物館の百犬図も、長らくそれぞれの館に寄託されていた作品だと記憶する。二点を寄託してもらうことに成功した先人たちへの敬意と感謝も込めてAと評価する。
出川委員	B	国立文化財機構として、博物館の根幹である館蔵品の充実にも努められていると思います。資料のデジタル化されたものについては、今後、誰でも高精細画像でアクセスできるように期待しています。
(2) 展覧事業		
自己点検評価 B 委員評価 A		
名児耶 部会長	委員 評価 A	平常展での入館者が、前年よりも増えている点が評価できる。特別展も全体に日本文化の原点や基本のものが充実し、意欲的と評価できる。さらに東京国立博物館の特別展開催数の増加も、評価できるが、昨年も述べたように、特別展の回数はもう少し減らして、一つ一つの展示にじっくりと取り組むことも必要かと思う。
浜田 副部会長	A	年度末は、新型コロナウイルス感染拡大防止対策により各館とも臨時休館となり、展示にも大きな影響を与えたが、多くの特別展において、目標値を大きく超える入館者を迎えたことは評価したい。その一方で、大半が達成率 200%を超えるという点が気になった。予測は難しいと思うが、目標値の設定方法を再検討する必要があるのかもしれない。
小松委員	B	
榊原委員	B	各館特別展の企画に力を注ぎ充実した内容となったが、やや時流に流された感があるのも否めない。そうした中、「毘沙門天―北方鎮護のカミ」展と「室町将軍―戦乱と美の室町十五代」展の優れた内容は大いに評価したい。 今後の研究に資するところ大であろう。またすべての館で平常陳列を重視しテーマ性、企画性を持たせている点、さらなる展開を期待する。
出川委員	A	「国宝 東寺―空海と仏像曼荼羅」「美を紡ぐ」「三国志」「正倉院の世界」「佐竹本三十六歌仙絵」「毘沙門天―北方鎮護のカミ」「室町将軍―戦乱と美の室町十五代」など話題性もあり一般にも分かり易い展示で、かつ質の高い内容の展覧会が開催されたことは大いに評価されます。
(3) 教育・普及活動		
自己点検評価 B 委員評価 B		
名児耶 部会長	委員 評価 B	かなり成果を挙げきており、A 評価に近いと思うが、さらなる発展も考えてほしい。
浜田 副部会長	B	資料の保存と公開は相反するものであるが、民間企業と連携した、文化財の活用に向けての、レプリカやVR等の映像コンテンツの開発は、資料保存の上でも重要であると考えられる。また、収蔵品データベースの外国語版の制作については、日本の文化財資源を世界に発信する意味で推進を期待したい。

小松委員	B	
榊原委員	A	講演会の開催だけでなく、学校教育との連携や館外活動の充実体験型教育プログラムの導入などさまざまな工夫で教育普及活動を展開している点、大いに評価する。その努力が明日の来館者となるだろう。
出川委員	B	様々な形で学習の機会が工夫されていると思います。
(4) 有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究		
自己点検評価 B 委員評価 B		
名児耶 部会長	委員 評価 B	おおむね実績報告書のとおりと判断します。多くの調査報告書の発行など、活発な活動を評価しますが、博物館活動での調査研究が、目先の特別展の忙しさのため制限されないことを期待します。とくに、長期保管している文化財のさらなる研究も進めてほしい。
浜田 副部会長	B	博物館の保存環境等に関する研究は、地方の小規模博物館では取り組みが難しいテーマであることから、国立博物館の果たす役割は大きいと考える。展示ケースや展示支持具の開発、文化財の安全輸送システムやIPMシステム等の研究成果が、全国の博物館活動に反映されることを期待したい。
小松委員	B	
榊原委員	B	調査研究は博物館活動すべての基礎となる。多忙な業務の中、よくこれを果たしていることに敬意を表したい。さらなる調査研究の充実を図りたい。
出川委員	B	展覧会活動にも反映される意欲的な調査研究がなされていたと思います。
(5) 国内外の博物館活動への寄与		
自己点検評価 B 委員評価 B		
名児耶 部会長	委員 評価 B	おおむね実績報告書のとおり、しっかりと目的を果たしていると思われる。これからも、日本の文化理解のための海外に向けた活動の持続を期待します。日本の文化の理解が世界の人々に日本を理解される早道であるから。
浜田 副部会長	B	全国の文化財担当者や、博物館学芸員に対する技術研修の更なる促進に期待したい。昨年も触れたが、国としての学芸員に対する研修の体系化を図ることが課題と思われる。
小松委員	B	
榊原委員	B	昨年も要望したが、地方への出前展の充実を願う。地方の人間が、美術史上の優品に接する機会はあるようで実は余りない。地方の人間がそんな機会を願うことにも一理あると思うのだが。
出川委員	B	地震などに対する防災設備の調査研究の実績が上がっている点が評価されます。
その他（総合的な事項、自己点検評価について等）		
名児耶 部会長		概ね自己評価のとおりと判断できるが、これからもこうした状況を維持していけるように望みます。
浜田 副部会長		9月に、日本で初めて国際博物館会議（ICOM）の大会が京都で開催されたが、大会の成功には、京都国立博物館を中心とした各国立博物館が果たした役割は大きいと考える。これを機会に、博物館間の一層の国際交流が推進されることを期待したい。 また、11月には、文化庁文化審議会に博物館部会が発足したが、目先の観光振興のために文化財を消耗させ、経済振興のために文化財を消費することは、あってはならないということ肝に銘じておきたい。
小松委員		毎年のことではあるが、限られた人員、予算のなかで各機関とも最善を尽くして業務を遂行している点に敬意を表したい。困難なことではあるが、今後は、IT技術などを活用したさらなる業務の効率化、外部資金調達の努力などが求められることになるだろう。なお、評価対象年度外の出来事ではあるが、新型コロナウイルスの蔓延によって博物館事業が大きな影響を受けている。今後、このような事態に対して有効な施策が打てるのかどうか、新年度には機構に属する施設が総力をあげて検討していく必要があると思う。
榊原委員		酷しいコロナ禍の中、ときに三密状態にならざるを得ない特別展はどうなるのか。その対策は。コロナ後の展覧会のあり方を模索しなければならない。
出川委員		COVID19の感染拡大予防のための臨時休館等の影響を除けば、所期の目標を十分に達成していると思います。またICOM京都大会に訪れた世界各国の博物館関係者にも各館の所蔵品展示が行き届いていました。

独立行政法人国立文化財機構外部評価委員評価書（博物館部会）

外部評価委員名 名児耶 明		※国立文化財機構の自己点検評価と異なる評価をされる場合は「委員評価」欄に評価※（参考参照）をご記入いただき、必ずコメントをご記入願います。 また、異なる場合でもコメントがございましたらご記入願います。			
全体評価	28年度	29年度	30年度	元年度	2年度
	B	B	B	B	—
【委員コメント】 概ね自己評価のとおりと判断できるが、これかもこうした状況を維持していけるように望みます。					
I 国民に対して提供するサービスその他業務の質の向上に関する目標を達成するためにとるべき措置					
〔博物館業務〕					
1. 有形文化財の保存と継承並びに有形文化財を活用した歴史・伝統文化の国内外への発信					
(1) 有形文化財の収集・保管、次代への継承					
自己点検 評価 B	委員評価	【委員コメント】 報告の通りと判断できる。新規購入や寄贈、寄託品の受入れも順調と判断できる。特に目立つ事業ではないが、着実にわが国の文化財を維持していくことは、文化財機構の最重要な使命である。			
(2) 展覧事業					
B	委員評価 A	【委員コメント】 平常点での入館者が、前年よりも増えている点が評価できる。特別展も全体に日本文化の原点や基本のものが充実し、意欲的と評価できる。さらに東京国立博物館の特別展開催数の増加も、評価できるが、昨年も述べたように、特別展の回数はもう少し減らして、一つ一つの展示にじっくりと取り組むことも必要かと思う。			
(3) 教育・普及活動					
B	委員評価	【委員コメント】 かなり成果を挙げきており、A評価に近いと思うが、さらなる発展も考えてほしい。			
(4) 有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究					
B	委員評価	【委員コメント】 おおむね実績報告書のとおりと判断します。多くの調査報告書の発行など、活発な活動を評価しますが、博物館活動での調査研究が、目先の特別展の忙しさのため制限されないことを期待します。とくに、長期保管している文化財のさらなる研究も進めてほしい。			
(5) 国内外の博物館活動への寄与					
B	委員評価	【委員コメント】 おおむね実績報告書のとおり、しっかりと目的を果たしていると思われる。これからも、日本の文化理解のための海外に向けた活動の持続を期待します。日本の文化の理解が世界の人々に日本を理解される早道であるから。			

(参考)

【年度計画に対する総合評価】

評価は以下の評定区分を使用している。

S：所期の目標を量的及び質的に上回る顕著な成果が得られている

A：所期の目標を上回る成果が得られている

B：所期の目標を達成している※

C：所期の目標を下回っており、改善を要する

D：所期の目標を下回っており、業務の廃止を含めた抜本的な改善を要する

※B評定が標準となる

独立行政法人国立文化財機構外部評価委員評価書（博物館部会）

外部評価委員名 浜田 弘明		※国立文化財機構の自己点検評価と異なる評価をされる場合は「委員評価」欄に評価※（参考参照）をご記入いただき、必ずコメントをご記入願います。 また、異なる場合でもコメントがございましたらご記入願います。			
全体評価	28年度	29年度	30年度	元年度	2年度
	B	B	B	B	—
<p>【委員コメント】9月に、日本で初めて国際博物館会議（I COM）の大会が京都で開催されたが、大会の成功には、京都国立博物館を中心とした各国立博物館が果たした役割は大きいと考える。これを機会に、博物館間の一層の国際交流が推進されることを期待したい。</p> <p>また、11月には、文化庁文化審議会に博物館部会が発足したが、目先の観光振興のために文化財を消耗させ、経済振興のために文化財を消費することは、あってはならないということを肝に銘じておきたい。</p>					
I 国民に対して提供するサービスその他業務の質の向上に関する目標を達成するためにとるべき措置					
〔博物館業務〕					
1. 有形文化財の保存と継承並びに有形文化財を活用した歴史・伝統文化の国内外への発信					
(1) 有形文化財の収集・保管、次代への継承					
自己点検評価	委員評価	【委員コメント】国立博物館は、地方の文化財が海外や民間へ流出することを防ぎ、国の宝を守るため、従来にも増して、購入を含む積極的な資料収集を進める必要に迫られていると考える。今後も、相応の資料収集のための予算確保とともに、収蔵スペースと収蔵環境の確保にも務めていただきたい。			
B					
(2) 展覧事業					
	委員評価	【委員コメント】年度末は、新型コロナウイルス感染拡大防止対策により各館とも臨時休館となり、展示にも大きな影響を与えたが、多くの特別展において、目標値を大きく超える入館者を迎えたことは評価したい。その一方で、大半が達成率200%を超えるという点が気になった。予測は難しいと思うが、目標値の設定方法を再検討する必要があるのかもしれない。			
B	A				
(3) 教育・普及活動					
	委員評価	【委員コメント】資料の保存と公開は相反するものであるが、民間企業と連携した、文化財の活用に向けての、レプリカやVR等の映像コンテンツの開発は、資料保存の上でも重要であると考え。また、収蔵品データベースの外国語版の制作については、日本の文化財資源を世界に発信する意味で推進を期待したい。			
B					
(4) 有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究					
	委員評価	【委員コメント】博物館の保存環境等に関する研究は、地方の小規模博物館では取り組みが難しいテーマであることから、国立博物館の果たす役割は大きいと考える。展示ケースや展示支持具の開発、文化財の安全輸送システムやIPMシステム等の研究成果が、全国の博物館活動に反映されることを期待したい。			
B					
(5) 国内外の博物館活動への寄与					
	委員評価	【委員コメント】全国の文化財担当者や、博物館学芸員に対する技術研修の更なる促進に期待したい。昨年も触れたが、国としての学芸員に対する研修の体系化を図ることが課題と思われる。			
B					

(参考)

【年度計画に対する総合評価】

評価は以下の評定区分を使用している。

- | |
|--|
| <p>S：所期の目標を量的及び質的に上回る顕著な成果が得られている</p> <p>A：所期の目標を上回る成果が得られている</p> <p>B：所期の目標を達成している※</p> <p>C：所期の目標を下回っており、改善を要する</p> <p>D：所期の目標を下回っており、業務の廃止を含めた抜本的な改善を要する</p> <p>※B評定が標準となる</p> |
|--|

独立行政法人国立文化財機構外部評価委員評価書（博物館部会）

外部評価委員名 小松 大秀		※国立文化財機構の自己点検評価と異なる評価をされる場合は「委員評価」欄に評価※（参考参照）をご記入いただき、必ずコメントをご記入願います。 また、異なる場合でもコメントがございましたらご記入願います。			
全体評価	28年度	29年度	30年度	元年度	2年度
	B	B	B	B	—
【委員コメント】 毎年のことではあるが、限られた人員、予算のなかで各機関とも最善を尽くして業務を遂行している点に敬意を表したい。困難なことではあるが、今後は、IT技術などを活用したさらなる業務の効率化、外部資金調達の努力などが求められることになるだろう。なお、評価対象年度外の出来事ではあるが、新型コロナウイルスの蔓延によって博物館事業が大きな影響を受けている。今後、このような事態に対して有効な施策が打てるのかどうか、新年度には機構に属する施設が総力をあげて検討していく必要があると思う。					
I 国民に対して提供するサービスその他業務の質の向上に関する目標を達成するためにとるべき措置					
〔博物館業務〕					
1. 有形文化財の保存と継承並びに有形文化財を活用した歴史・伝統文化の国内外への発信					
(1) 有形文化財の収集・保管、次代への継承					
自己点検 評価	委員評価	【委員コメント】			
B					
(2) 展覧事業を					
	委員評価	【委員コメント】			
B					
(3) 教育・普及活動					
	委員評価	【委員コメント】			
B					
(4) 有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究					
	委員評価	【委員コメント】			
B					
(5) 国内外の博物館活動への寄与					
	委員評価	【委員コメント】			
B					

(参考)

【年度計画に対する総合評価】

評価は以下の評定区分を使用している。

- | |
|---|
| <p>S：所期の目標を量的及び質的に上回る顕著な成果が得られている</p> <p>A：所期の目標を上回る成果が得られている</p> <p><u>B：所期の目標を達成している※</u></p> <p>C：所期の目標を下回っており、改善を要する</p> <p>D：所期の目標を下回っており、業務の廃止を含めた抜本的な改善を要する</p> <p>※B評定が標準となる</p> |
|---|

独立行政法人国立文化財機構外部評価委員評価書（博物館部会）

外部評価委員名 榊原 悟		※国立文化財機構の自己点検評価と異なる評価をされる場合は「委員評価」欄に評価※（参考参照）をご記入いただき、必ずコメントをご記入願います。 また、異なる場合でもコメントがございましたらご記入願います。			
全体評価	28年度	29年度	30年度	元年度	2年度
	B	B	B	B	—
【委員コメント】 酷しいコロナ禍の中、ときに三密状態にならざるを得ない特別展はどうか。その対策は、コロナ後の展覧会のあり方を模索しなければならない。					
I 国民に対して提供するサービスその他業務の質の向上に関する目標を達成するためにとるべき措置					
〔博物館業務〕					
1. 有形文化財の保存と継承並びに有形文化財を活用した歴史・伝統文化の国内外への発信					
(1) 有形文化財の収集・保管、次代への継承					
自己点検評価 B	委員評価 A	【委員コメント】各館限られた予算の中でよく収集の実を上げたと評価したい。その収集の方法として改めて寄託の充実を図りたい。購入となると所蔵者の事情もあった実現が難しいこともあるだろうが、寄託ならばそのハードルも低いからである。今回東京国立博物館が購入した浜松図屏風も、京都国立博物館の百犬図も、長らくそれぞれの館に寄託されていた作品だと記憶する。二点を寄託してもらうことに成功した先人たちへの敬意と感謝も込めてAと評価する。			
(2) 展覧事業					
B	委員評価 B	【委員コメント】各館特別展の企画に力を注ぎ充実した内容となったが、やや時流に流された感があるのも否めない。そうした中、「毘沙門天ー北方鎮護のカミ」展と「室町将軍一戦乱と美の室町十五代一」展の優れた内容は大いに評価したい。今後の研究に資するところ大であろう。またすべての館で平常陳列を重視しテーマ性、企画性を持たせている点、さらなる展開を期待する。			
(3) 教育・普及活動					
B	委員評価 A	【委員コメント】講演会の開催だけでなく、学校教育との連携や館外活動の充実体験型教育プログラムの導入などさまざまな工夫で教育普及活動を展開している点、大いに評価する。その努力が明日の来館者となるだろう。			
(4) 有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究					
B	委員評価 B	【委員コメント】調査研究は博物館活動すべての基礎となる。多忙な業務の中、よくこれを果たしていることに敬意を表したい。さらなる調査研究の充実を図りたい。			
(5) 国内外の博物館活動への寄与					
B	委員評価 B	【委員コメント】昨年も要望したが、地方への出前展の充実を願う。地方の人間が、美術史上の優品に接する機会はあるようで実は余りない。地方の人間がそんな機会を願うことにも一理あると思うのだが。			

(参考)

【年度計画に対する総合評価】

評価は以下の評定区分を使用している。

S：所期の目標を量的及び質的に上回る顕著な成果が得られている

A：所期の目標を上回る成果が得られている

B：所期の目標を達成している※

C：所期の目標を下回っており、改善を要する

D：所期の目標を下回っており、業務の廃止を含めた抜本的な改善を要する

※B評定が標準となる

独立行政法人国立文化財機構外部評価委員評価書（博物館部会）

外部評価委員名 出川 哲朗		※国立文化財機構の自己点検評価と異なる評価をされる場合は「委員評価」欄に評価※（参考参照）をご記入いただき、必ずコメントをご記入願います。 また、異なる場合でもコメントがございましたらご記入願います。			
全体評価	28年度	29年度	30年度	元年度	2年度
	B	B	B	B	—
【委員コメント】 COVID19 の感染拡大予防のための臨時休館等の影響を除けば、所期の目標を十分に達成していると思います。また ICOM 京都大会に訪れた世界各国の博物館関係者にも各館の所蔵品展示が行き届いていました。					
I 国民に対して提供するサービスその他業務の質の向上に関する目標を達成するためにとるべき措置					
〔博物館業務〕					
1. 有形文化財の保存と継承並びに有形文化財を活用した歴史・伝統文化の国内外への発信					
(1) 有形文化財の収集・保管、次代への継承					
自己点検 評価 B	委員評価 B	【委員コメント】 国立文化財機構として、博物館の根幹である館蔵品の充実に努められていると思います。資料のデジタル化されたものについては、今後、誰でも高精細画像でアクセスできるように期待しています。			
(2) 展覧事業					
B	委員評価 A	【委員コメント】 「国宝 東寺—空海と仏像曼荼羅」「美を紡ぐ」「三国志」「正倉院の世界」「佐竹本三十六歌仙絵」「毘沙門天—北方鎮護のカミ」「室町将軍—戦乱と美の室町十五代」など話題性もあり一般にも分かり易い展示で、かつ質の高い内容の展覧会が開催されたことは大いに評価されます。			
(3) 教育・普及活動					
B	委員評価 B	【委員コメント】 様々な形で学習の機会が工夫されていると思います。			
(4) 有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究					
B	委員評価 B	【委員コメント】 展覧会活動にも反映される意欲的な調査研究がなされていたと思います。			
(5) 国内外の博物館活動への寄与					
B	委員評価 B	【委員コメント】 地震などに対する防災設備の調査研究の実績が上がっている点が評価されます。			

(参考)

【年度計画に対する総合評価】

評価は以下の評定区分を使用している。

- | |
|--|
| <p>S：所期の目標を量的及び質的に上回る顕著な成果が得られている</p> <p>A：所期の目標を上回る成果が得られている</p> <p>B：所期の目標を達成している※</p> <p>C：所期の目標を下回っており、改善を要する</p> <p>D：所期の目標を下回っており、業務の廃止を含めた抜本的な改善を要する</p> <p>※B評定が標準となる</p> |
|--|

独立行政法人国立文化財機構外部評価委員会評価報告書

－令和元年度－

研究所・センター部会

独立行政法人国立文化財機構外部評価委員会

まとめ

自己点検評価 A 委員評価 A

2. 文化財及び海外の文化遺産の保護に貢献する調査研究、協力事業等の実施		
(1) 新たな知見の開拓につながる基礎的・探求的な調査研究		
自己点検評価 A 委員評価 A		
寺崎 部会長	委員 評価 A	各機関ともに限られた予算・人員の制約の中で、大きな成果を挙げているものと評価できる。自己点検評価「A」は妥当と考える。 藤原宮大極殿院地区の発掘調査（奈文研）では、予想もしない遺構が検出され、古代都城中枢部の変遷を考える上で重要な知見が得られた。引き続き調査を進め、解明に努めてもらいたい。
寺田 副部会長	A	各機関が積極的に事業に取り組み、目標を超える成果を上げている。 日本の伝統音楽文化を支える楽器作りの技術の伝承は危機に瀕していると言ってよい。プロジェクト 2121E は、喫緊の課題に取り組んでおり高く評価できるが、対象が限られているため、プロジェクトを継続、拡大する可能性を検討していただきたい。
児島委員	A	近年デジタル・アーカイブの充実に努めて来られており、令和元年度も成果がみられた。緊急事態宣言が続く現状、オープンアクセスの画像、文献の資料の重要性は一層増しており、今後も期待する。黒田、久米書簡は現在の黒田日記のようなかたちで公開できるとよい。Gettyとのリンクはトップページに表示して欲しい。
斎藤委員	A	—
柳林委員	A	<p>【奈良文化財研究所（奈文研）】</p> <p>奈文研は平城宮跡（奈良市）の発掘調査で知られるが、最初は現在の奈良国立博物館（以下、奈良博）のところにあり、南都の諸大寺の仏教美術や堂塔伽藍、古文書を調査、研究し、保存するための役割が主だった。その旧庁舎は奈良博の図書館として活用され、重要文化財になっている。</p> <p>このような歴史的経緯を顧みると、奈文研の法隆寺など歴史的建造物の実践的研究や、近畿を中心とする古寺社等の歴史資料の調査研究は極めて重要な活動だ。地道で息の長い作業は保存にも大きく寄与しており、小さな寺社までも大切な歴史的財産として対象にする姿勢は、少ない研究人員と予算という厳しい環境の中で評価され、市町村の頼りになっている。法隆寺の古材調査も大変な労苦を伴う作業で、名建築の変遷をたどる貴重な資料になる。十分な成果を期待したい。</p> <p>考古学的には、東大寺東塔の調査が大変注目される。奈良県立橿原考古学研究所との共同調査は非常に力強いもので、鎌倉時代と奈良時代の2期の遺構を確認し、門や回廊での時代の違いを突き止めた。これらは東塔復元原案の作成に役立っており、適時性、発展性、効率性、継続性も「A」とし、年度計画評価も「A」でよい。</p> <p>藤原宮大極殿東北部（橿原市）の調査は、大極殿後方に東西に延びる回廊を発見し、藤原宮の構造に再考を促す画期的な成果になった。存在が想定されていなかった遺構で、メディアでも大きく取り上げられ、今後の調査に関心が集まる。</p> <p>【東京文化財研究所（東文研）】</p> <p>無形文化遺産に対する積極的な取り組みは高く評価をされてよい。とくに唯一の研究部を持つ無形民俗文化財の調査研究と保存に向けての情熱あふれる取り組みは全国のネットワーク構築を推進し、頼りがいのある存在として素晴らしい実績を残している。少子化や自然災害などで危機に瀕している各地の無形文化遺産の映像などをデジタル化して記録していく活動にも努めており、意欲的な作業に頭が下がる。とりわけ、東日本大震災後のリーダーシップは特筆に値する活動だ。</p> <p>また、アジア太平洋無形文化遺産研究センター（IRCI、大阪府堺市）と協力して、昨年11月に国際シンポジウムを開いたことは喜ばしい。IRCIは人員、予算が不十分なだけに、今後も共同して調査研究や保存に取り組んでもらいたい。無形文化遺産は人々の精神的な支えにもなりうる意味で重要だ。期待したい。</p>

(2) 科学技術を応用した研究開発の進展等に向けた基盤的な研究

自己点検評価 A 委員評価 A

寺崎 部会長	委員 評価 A	科学的な手法を文化財研究に応用する分野は、各機関ともに最先端をゆき全国の当該分野研究を牽引しているが、今年度も十分な成果をあげたと認められ、自己点検評価「A」は妥当と考える。 ②文化財の保存修復及び保存技術に関する調査研究では、プロジェクト毎の自己評価のBが8件であるが、Aでも良いのではないかとと思われるものがいくつかあった。
寺田 副部会長	A	遺跡、遺物のデータを計測・記録する手法の開発と普及（プロジェクト 2212F）は、今後の考古学的調査の省力化に大きく貢献することが期待できる。
児島委員	A	—
斎藤委員	A	—
柳林委員	A	【東京文化財研究所】 科学技術の進歩は目覚ましく、特に東文研の絵画や工芸品に対する光学的研究は意欲的で画期的な成果を挙げている。国宝十二天像や春日権現験記絵巻などに対する彩色材料や技法の調査は、独自に開発した技術や機材を最大限に活用してこれまで分からなかった技法を解明した。利用範囲を広げてさらに成果を挙げてほしい。 文化財修復措置に関する研修と研究会が昨年10月に開かれた。イタリアの保存科学者を招いたが、応募者60人から20人を選んでの開催は受講したい人々の期待に沿えない対応であり残念だ。スペースや日時の限定などがあるのは分かるが内容がよく、学びたい人が多いということだけに、受講者を少しでも増やす努力はされたのだろうか。漏れた方々を救済するチャンスを与えてあげたい。 【奈良文化財研究所】 「高松塚古墳、キトラ古墳の恒久保存に関する調査研究」は、東文研との長い年月にわたる共同事業だ。高松塚古墳ではカビなどで劣化した国宝の壁画を、異例の石室解体で救う12年越しの取り組みであり、難事業だったが、カビなどをかなり除去し、保存処理を施した。事業は終わり、今後は莫大な費用をかけた修理ただけに壁画の公開などが求められると思うが、石材の劣化対策なども残っており、拙速は厳に慎みたい。いずれにしても関係者の労苦をたたえたい。 カビが生えて黒くなった壁画の部分は、装演師の地道な長年の作業のお陰で、美しさを取り戻したのは称賛に値する。文化庁は2度とこのようなことが起きてはならないことを当事者として改めて肝に銘じていただきたい。この研究成果が全国の装飾古墳や海外の壁画遺産などの保存に寄与することを切に願う。高松塚古墳の発掘調査（昭和47年）に少しだが参加した一人としても期待している。

(3) 文化遺産保護に関する国際協働

自己点検評価 A 委員評価 A

寺崎 部会長	委員 評価 A	各機関ともに、限られた人員で、文化財に関する保存・修理・調査等の分野において国際協力を進めており、高く評価できる。したがって、自己点検評価「A」は妥当と考える。 ただし、プロジェクト毎の自己評価としては、Aが3件、Bが9件となっている。上記(2)と同様に、こちらの評価を少し上げて良いのではなかろうか。
寺田 副部会長	A	活動内容を総合的に判断すれば、「A」判定は妥当であると考え。ただ、個別プロジェクト12件のうち「A」評価はわずか3件に過ぎず、年度計画評価の算出方法に準じて計算すると、平均値は3.25、つまり「B」評定となる。全体として「A」と自己評価するのであれば、その理由（個別プロジェクトの自己評価との整合性）を述べる必要はないだろうか。またこのような場合、評定の責任者を明らかにしてほしい。ちなみに、個別プロジェクトには責任者名が記載されている。 3機関とも世界各地の研究機関などと積極的に協働して大きな成果をあげており、成果の公開・共有も周到に行われている。
児島委員	A	—
斎藤委員	A	—

<p>柳林委員</p>	<p>A</p>	<p>【国立文化財機構】 文化や文化財への取り組みは世界平和に大きく貢献する。「平和の大使」とも呼ばれるゆえんだ。それは人々の心や精神を豊かにし、励まし、生きる喜びを与えてくれる。自信を呼び起こし、地域や国を愛する心や気持ちを醸成する。だから大切にしたい。次世代へ守り伝えていきたい。</p> <p>国立文化財機構の意義はまさにそれを中心になって進めることであり、誇りを持って仕事に向き合っていたきたい。文化遺産の保護はその大切な部門だ。経済優先になりがちな社会にあって、文化の位置や役割を高めることが肝心で、文化を通じた国際協働はこれからさらに力を入れるべき分野だろう。</p> <p>【東京文化財研究所】 カンボジアのアンコール地域で継続する遺跡の修復事業は着実に進んでいる。奈文研も25年にわたって同地域の遺跡の修復作業にかかわり、祠堂を解体して一から復元するという難関事業に取り組んでいる。東文研も奈文研と情報を共有しながら、発展途上国の文化行政に貢献していることは喜ばしい。</p> <p>加えて、カンボジアの考古学者や文化財保存の技術者を育てることに大きな力を注いでもらいたい。すでにそのことは奈文研で行われており、ノウハウを共有し、日本の研究者が帰った後も文化財保存を自国で自立してできることが最終目標といってもいい。技術や知恵、知識を惜しみなくカンボジアなどに伝えてほしい。</p> <p>また、東文研で昨年9月、メキシコで同10月にそれぞれ行われた「紙の保存と修復」の研修は、実習を伴う内容で多くの外国の研究者に喜ばれ、開催後のフォローもしっかりしており、大きな成果を挙げている。日本人の繊細で緻密な作業を伝授するこの研修は、海外の博物館や美術館などから常に強い開催の要望があるだけに、いっそうの発展が望まれる。参加者の満足度は100%であり、「適時性」「発展性」「効率性」も「A」で、年度計画評価も中期計画評価も「A」でよい。</p> <p>【奈良文化財研究所】 奈文研は上記にも書いたアンコール地域での祠堂の解体と再構築を行った。昨年12月にはこのプロジェクトの25周年記念式典が現地であり、カンボジアから感謝されたという。ユネスコの現地視察もあり、高い評価を受けたことは喜ばしい。</p> <p>昨年9月に京都で会ったICOM（国際博物館会議）には研究員4人を派遣し、オフサイトミーティングも行うなど国際協働に取り組んだ。また、4月にはイギリス・セインズベリー日本芸術研究所と共同研究に関する協議を行って6月に「シルクロードの両極における信仰の伝来」をテーマに国際セミナーを開催した。</p> <p>このほか、ミャンマーやウズベキスタン、ロシア、中国など多様な国々との情報交換を行ったほか、ユネスコ・アジア文化センターの研修やワークショップ、国際会議などにも精力的に協力し、国際貢献を果たしたことは大きな成果だ。</p> <p>【アジア太平洋無形文化遺産研究センター（IRCI）】 IRCIは今年で発足10年目を迎えた。ユネスコの目的に貢献するため、調査・研究を行うカテゴリー2センターとして、人材育成を担当する中国、情報ネットワークを担う韓国とともに役割を分担して2011年に設置された。</p> <p>ところが主体をなす研究部の正職員は今でもわずか1人で、あとはアソシエイトフェローが4人を占めている状態だ。任期付きで不安定な身分のアソシエイトフェローが多数を占める状況は他の機関でもみられ、毎年、改善を要望しているが、予算面で難しいのが現実だ。だからといって放っておいていいはずはない。絶えず、正職員の増加を求めていきたい。</p> <p>IRCIも継続的な取り組みが必要な分野だけにこの状態を早く解消したい。来年、満10年を迎える中で改善していただきたい。中国や韓国のカテゴリー2センターは人員も予算も充実していると聞く。同時に設置された他の2つのセンターにそんな色のないような態勢を、機構も国も作り上げてほしい。</p> <p>少ない人員と予算で懸命に活動している状況が、自己点検評価報告書からはっきりと読み取れる。文化財保存活用基金を活用して紛争後のアフガニスタンや東ティモールなどのパートナー機関と連携をとり、治安悪化が心配される中で無形文化遺産の現地調査や卓上調査を精力的に実施した。また、東京や京都で3回ものワークショップを開催し、無形文化遺産の情報収集や記録作成、保護に向けての取り組みについて意見を交換。いくつもの課題が前進した。</p> <p>しかし、驚いたのは継続性が「C」評価だったこと。IRCIの叫びが聞こえてくるようだ。素晴らしい活動なのに事業予算の安定的確保が難しいとして「C」評価にした。無念さが伝わる。機構としての前向きな対応を切実に願う。継続性が「C」</p>
-------------	----------	--

		であっても I R C I の責任ではないから、中期計画評価は「A」であってよい。科学研究費を東文研の協力で何とか引き出せないだろうか。今後も東文研と共同歩調をとって国際社会の信頼に応える精力的な活動を続けていってほしい。
(4) 文化財に関する情報資料の収集・整備及び調査研究成果の公開・活用		
自己点検評価 A 委員評価 A		
寺崎 部会長	委員 評価 A	自己点検評価「A」は妥当と考える。 定期刊行物・データベース・講演会など、研究成果の公開・活用は、社会的に大きな意味を持っているといえる。今後も継続して充実をはかってもらいたい。
寺田 副部会長	A	成果の公開には、様々なイベントが企画されており評価できるが、今後コロナウィルスの拡散防止対策の一環として、ネットの活用を含めた創造的な公開の方法を模索して欲しい。例えば、Zoom や Skype などを活用した相互交流的な現地説明会や講演会、ヴァーチャル展示など。
児島委員	A	—
斎藤委員	A	—
柳林委員	A	<p>どんなに素晴らしい研究や業績であっても、情報が公開され、国民や世界の人々に共有される状況でなければならない。「文化財は国民共有の財産」だからだ。その意味で、情報の公開と活用が極めて重要なことは論を待たない。</p> <p>【東京文化財研究所】 美術品入札会での目録「売立目録」に注目し、重要と思われる明治末期から戦前までの100冊の内容をデジタルアーカイブで公開したことは極めて注目され、高い評価を与えられてよい。視点が素晴らしい。 明治以降、武家や豪商などが経済的な苦境から所蔵する美術品を手放すケースがあり、日本や東洋美術を代表するような名品までもが売りに出された。東文研はこれらの売立目録を2532冊も所蔵しており、一大コレクションだ。従来からカードなどで情報は公開、利用されてきたが、2015年から東京美術倶楽部との共同で目録のデジタル化事業に取り組み、昨年、デジタルアーカイブとして完成した。 売立目録には、行方不明の美術品や関東大震災、第二次大戦などで失われた美術品などもあり、得られる情報は豊富だ。売りに出した当時の所有者の経済的状況がわかるなど戦前における政治、経済、社会史的な研究の重要な資料になるほか、目録を経年的にたどれば不明の美術品に近づくことが可能になるかもしれない。 最近、1億円の値がついた銅鐸が最初のカラーページに載った売立目録を見たことがあった。見ているだけで楽しい売立目録だが、今後もしっかりと収集し、できるだけ多くの図版が入った目録の公開をお願いしたい。買い取った人を突き止めることは難しいが、それらを探ることで美術品の動きに迫るのも可能かもしれない。</p> <p>【奈良文化財研究所】 新庁舎（奈良市）が2年前にオープンした。立派な庁舎と充実した設備は考古学のナショナルセンターとして調査、研究、保存を担う機関としてふさわしい。 ところが重要な情報公開にとって肝心の一般の人が利用できる資料閲覧室や図書資料室が狭いように感じた。そのことはすでに外部評価で報告したと思う。 今回、利用者の立場で改善してくれたことに感謝したい。書庫内に閲覧機を増設し、閲覧スペースを拡張するとともに、閲覧室の照明器具を増やして机上の明るさをいっそう増強した。利用しやすくするための改良であり、喜ばれていると思う。ただ、一般利用者は229人とどまって少ない。膨大な図書をさらに利用してもらうような取り組みを望む。 平城宮跡資料館で行った夏期企画展「ならのみやこのしよくぶつえん」は、奈良国立博物館の「祈りの世界の動物たち」と同時期に開催。奈良にある国立文化財機構の施設が連携し、関連するテーマで展覧会を行った初めての試みだった。好評で、両方の展覧会を見る人もおり、今後も機会あるごとに連携して関連展示を実現していただきたい。奥の深い展示になる。今回は入館料がどうだったか不明だが、共通券を出して割引があるようにすれば入館者にとってより便利だろう。</p>

(5) 地方公共団体等を対象とする文化財に関する研修及び協力等

自己点検評価 **A** 委員評価 **A**

寺崎 部会長	委員 評価 A	自己点検評価「A」は妥当と考える。 各種団体に対する文化財の調査指導・研修等についても、長年にわたって継続して実施されており、その実績を高く評価したい。
寺田 副部会長	A	両研究所とも、地方公共団体などに対する専門的知識の提供や地方における人材育成において、文化財に関する国の中核機関としての役割を十分に果たしている。
児島委員	S	全国各地の被災文化財に対する継続的な取り組みは大変意義深い。特に台風をはじめとする自然災害の増加の中で、指針を示し、情報の収集、公開をおこなった。台風19号による被災館への救援活動も重要であった。
斎藤委員	A	—
柳林委員	A	【東京・奈良文化財研究所】 ・東文研、奈文研とも、ナショナルセンターとして全国の行政機関や研究機関を指導し、助言する役割を担う。その責務を果たすために多彩なプログラムを用意して自治体職員を研修したり、全国に出かけて指導したりしている。とくに日進歩の文化財調査における最新の技術を伝え、地方でも活用することが重要だから、両研究所員の苦労も並大抵ではないが、地方のレベルアップに尽力していただきたい。 ・奈文研の文化財担当研修は昭和49年から続いており、延べ9900人もの受講者を数えた。今年度も14課程に目標値を上回る199人もの受講者があり、技術の向上に大きく貢献した。一方、東文研でも博物館や美術館の保存担当学芸員を対象に研修を実施したり連携大学院の学生を教えたりして、人材育成に貢献していることは高い評価を受けて当然である。

その他（総合的な事項、自己点検評価について等）

寺崎 部会長	<ul style="list-style-type: none"> ・昨年度から、総会・部会の開催方式が変わり、特に研究所・センター部会委員が総会に参加できなくなったことに異論が多く出された点については、その後、検討がなされたのであろうか。一案として、従来のようにセンター部会と総会・博物館部会を別の月に分散するのではなく、同一場所で2日間にわたって集中して開催すればセンター部会委員も総会に参加できるのではないかと、などと思うが、そうした方式は難しいのであろうか。より良い開催方法を引き続き検討していただきたい。 ・「自己点検評価報告書」を検討する際には、前年度の報告書等と比較しながら読むことになるが、同一プロジェクトで、前年度と比べて自己評価が上下したもののについては、その理由を明記してもらえると良いのではなかろうか。プロジェクトによっては、自己評価が変動しているにもかかわらず、前年度とほぼ同文の「評定理由」になっているものも散見する。 ・また、実績を示す件数についても、可能ならば、前年度比を示してもらえると、一つの目安になると思われる。そうした点でいえば、各機関の研究員による論文発表数が、前年度に比べて大きく増加していることは高く評価される。多忙な中で研究成果を公にする努力を重ねている研究員諸氏に対して、敬意を表したい。
寺田 副部会長	<ul style="list-style-type: none"> ・少数ではあるが、実績概要の記述が不十分な報告書が存在する(96、97、106頁など)。設定された目的に対して、どのような活動を行ったか、どのような知見があったのかを記述していただくとうまく評価がしやすくなる。 ・前年度にも指摘した通り、IRCIは無形文化遺産に関して重要な活動を行なっているが、活動の継続性が予算的に担保されていないのは大きな問題である。全体予算が逼迫する状況下、他機関と同じく自助努力が求められることは言うまでもないが、機構におけるセンターの位置付けを再考したうえで、予算配分に配慮が必要ではないだろうか。
児島委員	<ul style="list-style-type: none"> ・新型コロナウイルスの蔓延する現状、特に展覧会事業への影響は大きい。大規模動員展が今後維持できるかわからないが、現実の文化財、美術品に触れることの重要性、それらを保存して受け継ぐことの必要性に多くの方が気づく機会となるのではないかと。一方で様々な危機に際して、文化財研究所、センターがこれまでに蓄積してきた活動や経験値が有効であり、力を発揮している。予算的な困難が予想されるが、今後も継続的な一層の活動が望まれる。
斎藤委員	<ul style="list-style-type: none"> 文化財を調査するために、つねに新しい技術の探索と研究開発を継続的に行っており、また、それらを文化財の特質にあわせてうまく適用している点が高く評価できる。開発・応用・文化財保護・得られた成果の情報発信のそれぞれが連動して機能しており、研究者のみならず行政機関や一般に対しても有用な業績を積み重ねているとよい。
柳林委員	<ul style="list-style-type: none"> ・新型コロナウイルスの感染拡大で、国の財政が危機的な状況に陥ることが危惧される。そんな中で漸減する国から機構への運営費交付金がさらに削減されないか心配だ。そのような

ことがないように今から対策を考えておくべきだろう。いつもしわ寄せがくるのは文化行政だからだ。

- ・今年4月7日の参議院文教科学委員会で文化芸術問題が俎上にのぼった。萩生田文科相や今里謙・文化庁次長は「文化芸術振興を倍増するのを支援」「(博物館などが)役割を十分果たせるよう必要な人材確保に向けた支援に努める」「博物館支援策をしっかりと講じる」と答えている。脳裏に焼き付けてほしい。
- ・博物館や機構の自己点検評価報告書や機構を評価する資料を送ってほしい。研究所と博物館は密接に関係する。機構をバックアップするためにも資料がいただきたいし、オブザーバーでもいいので総会にも出席させていただきたい。そこで博物館や機構関係者と交流することで報告の中身が一段と濃くなる。「以前のように博物館にもかかわりたい」との委員の要望に、松村理事長は昨年、「何とかする」と述べている。

独立行政法人国立文化財機構外部評価委員評価書（研究所・センター部会）

外部評価委員名		※国立文化財機構の自己点検評価と異なる評価をされる場合は「委員評価」欄に評価※（参考参照）をご記入いただき、必ずコメントをご記入願います。 また、異なる場合でもコメントがございましたらご記入願います。
寺崎 保広		
I 国民に対して提供するサービスその他業務の質の向上に関する目標を達成するためにとるべき措置		
【研究所・センター業務】		
2. 文化財及び海外の文化遺産の保護に貢献する調査研究、協力事業等の実施		
(1) 新たな知見の開拓につながる基礎的・探求的な調査研究		
自己点検評価	委員評価	【委員コメント】 各機関ともに限られた予算・人員の制約の中で、大きな成果を挙げているものと評価できる。自己点検評価「A」は妥当と考える。 藤原宮大極殿院地区の発掘調査（奈文研）では、予想もしない遺構が検出され、古代都城中枢部の変遷を考える上で重要な知見が得られた。引き続き調査を進め、解明に努めてもらいたい。
A		
(2) 科学技術を応用した研究開発の進展等に向けた基盤的な研究		
	委員評価	【委員コメント】 科学的な手法を文化財研究に応用する分野は、各機関ともに最先端をゆき全国の当該分野研究を牽引しているが、今年度も十分な成果をあげたと認められ、自己点検評価「A」は妥当と考える。 ②文化財の保存修復及び保存技術に関する調査研究では、プロジェクト毎の自己評価のBが8件であるが、Aでも良いのではないかとと思われるものがいくつかあった。
A		
(3) 文化遺産保護に関する国際協働		
	委員評価	【委員コメント】 各機関ともに、限られた人員で、文化財に関する保存・修理・調査等の分野において国際協力を進めており、高く評価できる。したがって、自己点検評価「A」は妥当と考える。 ただし、プロジェクト毎の自己評価としては、Aが3件、Bが9件となっている。上記（2）と同様に、こちらの評価を少し上げて良いのではなかろうか。
A		
(4) 文化財に関する情報資料の収集・整備及び調査研究成果の公開・活用		
	委員評価	【委員コメント】 自己点検評価「A」は妥当と考える。 定期刊行物・データベース・講演会など、研究成果の公開・活用は、社会的に大きな意味を持っているといえる。今後も継続して充実をはかってもらいたい。
A		
(5) 地方公共団体等を対象とする文化財に関する研修及び協力等		
	委員評価	【委員コメント】 自己点検評価「A」は妥当と考える。 各種団体に対する文化財の調査指導・研修等についても、長年にわたって継続して実施されており、その実績を高く評価したい。
A		

その他（総合的な事項、自己点検評価について等）

【委員コメント】

・昨年度から、総会・部会の開催方式が変わり、特に研究所・センター部会委員が総会に参加できなくなったことに異論が多く出された点については、その後、検討がなされたのであろうか。一案として、従来のようにセンター部会と総会・博物館部会を別の月に分散するのではなく、同一場所で2日間にわたって集中して開催すればセンター部会委員も総会に参加できるのではないかと、などと思うが、そうした方式は難しいのであろうか。より良い開催方法を引き続き検討していただきたい。

・「自己点検評価報告書」を検討する際には、前年度の報告書等と比較しながら読むことになるが、同一プロジェクトで、前年度と比べて自己評価が上下したのものについては、その理由を明記してもらえると良いのではなかろうか。プロジェクトによっては、自己評価が変動しているにもかかわらず、前年度とほぼ同文の「評定理由」になっているものも散見する。

・また、実績を示す件数についても、可能ならば、前年度比を示してもらえると、一つの目安になると思われる。そうした点でいえば、各機関の研究者による論文発表数が、前年度に比べて大きく増加していることは高く評価される。多忙な中で研究成果を公にする努力を重ねている研究者諸氏に対して、敬意を表したい。

（参考）

【年度計画に対する総合評価】

評価は以下の評定区分を使用している。

S：所期の目標を量的及び質的に上回る顕著な成果が得られている

A：所期の目標を上回る成果が得られている

B：所期の目標を達成している※

C：所期の目標を下回っており、改善を要する

D：所期の目標を下回っており、業務の廃止を含めた抜本的な改善を要する

※B評定が標準となる

独立行政法人国立文化財機構外部評価委員評価書（研究所・センター部会）

外部評価委員名		※国立文化財機構の自己点検評価と異なる評価をされる場合は「委員評価」欄に評価※（参考参照）をご記入いただき、必ずコメントをご記入願います。 また、異なる場合でもコメントがございましたらご記入願います。
寺田 吉孝		
I 国民に対して提供するサービスその他業務の質の向上に関する目標を達成するためにとるべき措置		
【研究所・センター業務】		
2. 文化財及び海外の文化遺産の保護に貢献する調査研究、協力事業等の実施		
(1) 新たな知見の開拓につながる基礎的・探求的な調査研究		
自己点検評価	委員評価	【委員コメント】
A	A	<ul style="list-style-type: none"> 各機関が積極的に事業に取り組み、目標を超える成果を上げている。 日本の伝統音楽文化を支える楽器作りの技術の伝承は危機に瀕していると言っている。プロジェクト 2121E は、喫緊の課題に取り組んでおり高く評価できるが、対象が限られているため、プロジェクトを継続、拡大する可能性を検討していただきたい。
(2) 科学技術を応用した研究開発の進展等に向けた基盤的な研究		
	委員評価	【委員コメント】
A	A	<ul style="list-style-type: none"> 遺跡、遺物のデータを計測・記録する手法の開発と普及（プロジェクト 2212F）は、今後の考古学的調査の省力化に大きく貢献することが期待できる。
(3) 文化遺産保護に関する国際協働		
	委員評価	【委員コメント】
A	A	<ul style="list-style-type: none"> 活動内容を総合的に判断すれば、「A」判定は妥当であると考ええる。ただ、個別プロジェクト 12 件のうち「A」評価はわずか 3 件に過ぎず、年度計画評価の算出方法に準じて計算すると、平均値は 3.25、つまり「B」評定となる。全体として「A」と自己評価するのであれば、その理由（個別プロジェクトの自己評価との整合性）を述べる必要はないだろうか。またこのような場合、評定の責任者を明らかにしてほしい。ちなみに、個別プロジェクトには責任者名が記載されている。 3機関とも世界各地の研究機関などと積極的に協働して大きな成果をあげており、成果の公開・共有も周到に行われている。
(4) 文化財に関する情報資料の収集・整備及び調査研究成果の公開・活用		
	委員評価	【委員コメント】
A	A	<ul style="list-style-type: none"> 成果の公開には、様々なイベントが企画されており評価できるが、今後コロナウィルスの拡散防止対策の一環として、ネットの活用を含めた創造的な公開の方法を模索して欲しい。例えば、Zoom や Skype などを活用した相互交流的な現地説明会や講演会、ヴァーチャル展示など。
(5) 地方公共団体等を対象とする文化財に関する研修及び協力等		
	委員評価	【委員コメント】
A	A	<ul style="list-style-type: none"> 両研究所とも、地方公共団体などに対する専門的知識の提供や地方における人材育成において、文化財に関する国の中核機関としての役割を十分に果たしている。

その他（総合的な事項、自己点検評価について等）

【委員コメント】

- ・ 少数ではあるが、実績概要の記述が不十分な報告書が存在する（96、97、106 頁など）。設定された目的に対して、どのような活動を行ったか、どのような知見があったのかを記述していただくと評価がしやすくなる。
- ・ 前年度にも指摘した通り、IRCI は無形文化遺産に関して重要な活動を行なっているが、活動の継続性が予算的に担保されていないのは大きな問題である。全体予算が逼迫する状況下、他機関と同じく自助努力が求められることは言うまでもないが、機構におけるセンターの位置付けを再考したうえで、予算配分に配慮が必要ではないだろうか。

（参考）

【年度計画に対する総合評価】

評価は以下の評定区分を使用している。

S：所期の目標を量的及び質的に上回る顕著な成果が得られている

A：所期の目標を上回る成果が得られている

B：所期の目標を達成している※

C：所期の目標を下回っており、改善を要する

D：所期の目標を下回っており、業務の廃止を含めた抜本的な改善を要する

※B評定が標準となる

独立行政法人国立文化財機構外部評価委員評価書（研究所・センター部会）

外部評価委員名		※国立文化財機構の自己点検評価と異なる評価をされる場合は「委員評価」欄に評価※（参考参照）をご記入いただき、必ずコメントをご記入願います。 また、異なる場合でもコメントがございましたらご記入願います。
児島 薫		
I 国民に対して提供するサービスその他業務の質の向上に関する目標を達成するためにとるべき措置		
〔研究所・センター業務〕		
2. 文化財及び海外の文化遺産の保護に貢献する調査研究、協力事業等の実施		
(1) 新たな知見の開拓につながる基礎的・探求的な調査研究		
自己点検評価	委員評価	【委員コメント】
A		近年デジタル・アーカイブの充実に努めて来られており、令和元年度も成果がみられた。緊急事態宣言が続く現状、オープンアクセスの画像、文献の資料の重要性は一層増しており、今後も期待する。黒田、久米書簡は現在の黒田日記のようなかたちで公開できるとよい。Gettyとのリンクはトップページに表示して欲しい。
(2) 科学技術を応用した研究開発の進展等に向けた基盤的な研究		
	委員評価	【委員コメント】
A		
(3) 文化遺産保護に関する国際協働		
	委員評価	【委員コメント】
A		
(4) 文化財に関する情報資料の収集・整備及び調査研究成果の公開・活用		
	委員評価	【委員コメント】
A		
(5) 地方公共団体等を対象とする文化財に関する研修及び協力等		
	委員評価	【委員コメント】
A	S	全国各地の被災文化財に対する継続的な取り組みは大変意義深い。特に台風をはじめとする自然災害の増加の中で、指針を示し、情報の収集、公開をおこなった。台風19号による被災館への救援活動も重要であった。
その他（総合的な事項、自己点検評価について等）		
【委員コメント】 新型コロナウイルスの蔓延する現状、特に展覧会事業への影響は大きい。大規模動員展が今後維持できるかわからないが、現実の文化財、美術品に触れることの重要性、それらを保存して受け継ぐことの必要性に多くの人が気づく機会となるのではないかと。一方で様々な危機に際して、文化財研究所、センターがこれまでに蓄積してきた活動や経験値が有効であり、力を発揮している。予算的な困難が予想されるが、今後も継続的な一層の活動が望まれる。		

(参考)

【年度計画に対する総合評価】

評価は以下の評定区分を使用している。

- | |
|--|
| <p>S：所期の目標を量的及び質的に上回る顕著な成果が得られている</p> <p>A：所期の目標を上回る成果が得られている</p> <p>B：所期の目標を達成している※</p> <p>C：所期の目標を下回っており、改善を要する</p> <p>D：所期の目標を下回っており、業務の廃止を含めた抜本的な改善を要する</p> <p>※B評定が標準となる</p> |
|--|

独立行政法人国立文化財機構外部評価委員評価書（研究所・センター部会）

外部評価委員名		※国立文化財機構の自己点検評価と異なる評価をされる場合は「委員評価」欄に評価※（参考参照）をご記入いただき、必ずコメントをご記入願います。 また、異なる場合でもコメントがございましたらご記入願います。
齋藤 努		
I 国民に対して提供するサービスその他業務の質の向上に関する目標を達成するためにとるべき措置		
【研究所・センター業務】		
2. 文化財及び海外の文化遺産の保護に貢献する調査研究、協力事業等の実施		
(1) 新たな知見の開拓につながる基礎的・探求的な調査研究		
自己点検評価	委員評価	【委員コメント】
A	A	
(2) 科学技術を応用した研究開発の進展等に向けた基盤的な研究		
	委員評価	【委員コメント】
A	A	
(3) 文化遺産保護に関する国際協働		
	委員評価	【委員コメント】
A	A	
(4) 文化財に関する情報資料の収集・整備及び調査研究成果の公開・活用		
	委員評価	【委員コメント】
A	A	
(5) 地方公共団体等を対象とする文化財に関する研修及び協力等		
	委員評価	【委員コメント】
A	A	
その他（総合的な事項、自己点検評価について等）		
【委員コメント】 文化財を調査するために、つねに新しい技術の探索と研究開発を継続的に行っており、また、それらを文化財の特質にあわせてうまく適用している点が高く評価できる。開発・応用・文化財保護・得られた成果の情報発信のそれぞれが連動して機能しており、研究者のみならず行政機関や一般に対しても有用な業績を積み重ねているとよい。		

(参考)

【年度計画に対する総合評価】

評価は以下の評定区分を使用している。

- | |
|--|
| <p>S：所期の目標を量的及び質的に上回る顕著な成果が得られている</p> <p>A：所期の目標を上回る成果が得られている</p> <p>B：所期の目標を達成している※</p> <p>C：所期の目標を下回っており、改善を要する</p> <p>D：所期の目標を下回っており、業務の廃止を含めた抜本的な改善を要する</p> <p>※B評定が標準となる</p> |
|--|

独立行政法人国立文化財機構外部評価委員評価書（研究所・センター部会）

<p>外部評価委員名</p> <p>柳林 修</p>	<p>※国立文化財機構の自己点検評価と異なる評価をされる場合は「委員評価」欄に評価※（参考参照）をご記入いただき、必ずコメントをご記入願います。</p> <p>また、異なる場合でもコメントがございましたらご記入願います。</p>		
<p>I 国民に対して提供するサービスその他業務の質の向上に関する目標を達成するためにとるべき措置</p>			
<p>〔研究所・センター業務〕</p>			
<p>2. 文化財及び海外の文化遺産の保護に貢献する調査研究、協力事業等の実施</p>			
<p>(1) 新たな知見の開拓につながる基礎的・探求的な調査研究</p>			
<p>自己点検評価</p> <p>A</p>	<table border="1"> <tr> <td data-bbox="314 817 448 884"> <p>委員評価</p> </td> <td data-bbox="448 817 1410 1953"> <p>【奈良文化財研究所（奈文研）】</p> <p>奈文研は平城宮跡（奈良市）の発掘調査で知られるが、最初は現在の奈良国立博物館（以下、奈良博）のところにあり、南都の諸大寺の仏教美術や堂塔伽藍、古文書を調査、研究し、保存するための役割が主だった。その旧庁舎は奈良博の図書館として活用され、重要文化財になっている。</p> <p>このような歴史的経緯を顧みると、奈文研の法隆寺など歴史的建造物の実践的研究や、近畿を中心とする古寺社等の歴史資料の調査研究は極めて重要な活動だ。地道で息の長い作業は保存にも大きく寄与しており、小さな寺社までも大切な歴史的財産として対象にする姿勢は、少ない研究人員と予算という厳しい環境の中で評価され、市町村の頼りになっている。法隆寺の古材調査も大変な労苦を伴う作業で、名建築の変遷をたどる貴重な資料になる。十分な成果を期待したい。</p> <p>考古学的には、東大寺東塔の調査が大変注目される。奈良県立橿原考古学研究所との共同調査は非常に力強いもので、鎌倉時代と奈良時代の2期の遺構を確認し、門や回廊での時代の違いを突き止めた。これらは東塔復元原案の作成に役立っており、適時性、発展性、効率性、継続性も「A」とし、年度計画評価も「A」でよい。</p> <p>藤原宮大極殿東北部（橿原市）の調査は、大極殿後方に東西に延びる回廊を発見し、藤原宮の構造に再考を促す画期的な成果になった。存在が想定されていなかった遺構で、メディアでも大きく取り上げられ、今後の調査に関心が集まる。</p> <p>【東京文化財研究所（東文研）】</p> <p>無形文化遺産に対する積極的な取り組みは高く評価をされてよい。とくに唯一の研究部を持つ無形民俗文化財の調査研究と保存に向けての情熱あふれる取り組みは全国のネットワーク構築を推進し、頼りがいのある存在として素晴らしい実績を残している。少子化や自然災害などで危機に瀕している各地の無形文化遺産の映像などをデジタル化して記録していく活動にも努めており、意欲的な作業に頭が下がる。とりわけ、東日本大震災後のリーダーシップは特筆に値する活動だ。</p> <p>また、アジア太平洋無形文化遺産研究センター（IRCI、大阪府堺市）と協力して、昨年11月に国際シンポジウムを開いたことは喜ばしい。IRCIは人員、予算が不十分なだけに、今後も共同して調査研究や保存に取り組んでもらいたい。無形文化遺産は人々の精神的な支えにもなりうる意味で重要だ。期待したい。</p> </td> </tr> </table>	<p>委員評価</p>	<p>【奈良文化財研究所（奈文研）】</p> <p>奈文研は平城宮跡（奈良市）の発掘調査で知られるが、最初は現在の奈良国立博物館（以下、奈良博）のところにあり、南都の諸大寺の仏教美術や堂塔伽藍、古文書を調査、研究し、保存するための役割が主だった。その旧庁舎は奈良博の図書館として活用され、重要文化財になっている。</p> <p>このような歴史的経緯を顧みると、奈文研の法隆寺など歴史的建造物の実践的研究や、近畿を中心とする古寺社等の歴史資料の調査研究は極めて重要な活動だ。地道で息の長い作業は保存にも大きく寄与しており、小さな寺社までも大切な歴史的財産として対象にする姿勢は、少ない研究人員と予算という厳しい環境の中で評価され、市町村の頼りになっている。法隆寺の古材調査も大変な労苦を伴う作業で、名建築の変遷をたどる貴重な資料になる。十分な成果を期待したい。</p> <p>考古学的には、東大寺東塔の調査が大変注目される。奈良県立橿原考古学研究所との共同調査は非常に力強いもので、鎌倉時代と奈良時代の2期の遺構を確認し、門や回廊での時代の違いを突き止めた。これらは東塔復元原案の作成に役立っており、適時性、発展性、効率性、継続性も「A」とし、年度計画評価も「A」でよい。</p> <p>藤原宮大極殿東北部（橿原市）の調査は、大極殿後方に東西に延びる回廊を発見し、藤原宮の構造に再考を促す画期的な成果になった。存在が想定されていなかった遺構で、メディアでも大きく取り上げられ、今後の調査に関心が集まる。</p> <p>【東京文化財研究所（東文研）】</p> <p>無形文化遺産に対する積極的な取り組みは高く評価をされてよい。とくに唯一の研究部を持つ無形民俗文化財の調査研究と保存に向けての情熱あふれる取り組みは全国のネットワーク構築を推進し、頼りがいのある存在として素晴らしい実績を残している。少子化や自然災害などで危機に瀕している各地の無形文化遺産の映像などをデジタル化して記録していく活動にも努めており、意欲的な作業に頭が下がる。とりわけ、東日本大震災後のリーダーシップは特筆に値する活動だ。</p> <p>また、アジア太平洋無形文化遺産研究センター（IRCI、大阪府堺市）と協力して、昨年11月に国際シンポジウムを開いたことは喜ばしい。IRCIは人員、予算が不十分なだけに、今後も共同して調査研究や保存に取り組んでもらいたい。無形文化遺産は人々の精神的な支えにもなりうる意味で重要だ。期待したい。</p>
<p>委員評価</p>	<p>【奈良文化財研究所（奈文研）】</p> <p>奈文研は平城宮跡（奈良市）の発掘調査で知られるが、最初は現在の奈良国立博物館（以下、奈良博）のところにあり、南都の諸大寺の仏教美術や堂塔伽藍、古文書を調査、研究し、保存するための役割が主だった。その旧庁舎は奈良博の図書館として活用され、重要文化財になっている。</p> <p>このような歴史的経緯を顧みると、奈文研の法隆寺など歴史的建造物の実践的研究や、近畿を中心とする古寺社等の歴史資料の調査研究は極めて重要な活動だ。地道で息の長い作業は保存にも大きく寄与しており、小さな寺社までも大切な歴史的財産として対象にする姿勢は、少ない研究人員と予算という厳しい環境の中で評価され、市町村の頼りになっている。法隆寺の古材調査も大変な労苦を伴う作業で、名建築の変遷をたどる貴重な資料になる。十分な成果を期待したい。</p> <p>考古学的には、東大寺東塔の調査が大変注目される。奈良県立橿原考古学研究所との共同調査は非常に力強いもので、鎌倉時代と奈良時代の2期の遺構を確認し、門や回廊での時代の違いを突き止めた。これらは東塔復元原案の作成に役立っており、適時性、発展性、効率性、継続性も「A」とし、年度計画評価も「A」でよい。</p> <p>藤原宮大極殿東北部（橿原市）の調査は、大極殿後方に東西に延びる回廊を発見し、藤原宮の構造に再考を促す画期的な成果になった。存在が想定されていなかった遺構で、メディアでも大きく取り上げられ、今後の調査に関心が集まる。</p> <p>【東京文化財研究所（東文研）】</p> <p>無形文化遺産に対する積極的な取り組みは高く評価をされてよい。とくに唯一の研究部を持つ無形民俗文化財の調査研究と保存に向けての情熱あふれる取り組みは全国のネットワーク構築を推進し、頼りがいのある存在として素晴らしい実績を残している。少子化や自然災害などで危機に瀕している各地の無形文化遺産の映像などをデジタル化して記録していく活動にも努めており、意欲的な作業に頭が下がる。とりわけ、東日本大震災後のリーダーシップは特筆に値する活動だ。</p> <p>また、アジア太平洋無形文化遺産研究センター（IRCI、大阪府堺市）と協力して、昨年11月に国際シンポジウムを開いたことは喜ばしい。IRCIは人員、予算が不十分なだけに、今後も共同して調査研究や保存に取り組んでもらいたい。無形文化遺産は人々の精神的な支えにもなりうる意味で重要だ。期待したい。</p>		

(2) 科学技術を応用した研究開発の進展等に向けた基盤的な研究		
A	委員評価	<p>【東京文化財研究所】</p> <p>科学技術の進歩は目覚ましく、特に東文研の絵画や工芸品に対する光学的研究は意欲的で画期的な成果を挙げている。国宝十二天像や春日権現験記絵巻などに対する彩色材料や技法の調査は、独自に開発した技術や機材を最大限に活用してこれまで分からなかった技法を解明した。利用範囲を広げてさらに成果を挙げてほしい。</p> <p>文化財修復措置に関する研修と研究会が昨年10月に開かれた。イタリアの保存科学者を招いたが、応募者60人から20人を選んでの開催は受講したい人々の期待に沿えない対応であり残念だ。スペースや日時の限定などがあるのは分かるが内容がよく、学びたい人が多いということだけに、受講者を少しでも増やす努力はされたのだろうか。漏れた方々を救済するチャンスを与えてあげたい。</p>
	A	<p>【奈良文化財研究所】</p> <p>「高松塚古墳、キトラ古墳の恒久保存に関する調査研究」は、東文研との長い年月にわたる共同事業だ。高松塚古墳ではカビなどで劣化した国宝の壁画を、異例の石室解体で救う12年越しの取り組みであり、難事業だったが、カビなどをかなり除去し、保存処理を施した。事業は終わり、今後は莫大な費用をかけた修理だけでなく壁画の公開などが求められると思うが、石材の劣化対策なども残っており、拙速は厳に慎みたい。いずれにしても関係者の労苦をたたえたい。</p> <p>カビが生えて黒くなった壁画の部分は、装飾師の地道な長年の作業のお陰で、美しさを取り戻したのは称賛に値する。文化庁は2度とこのようなことが起きてはならないことを当事者として改めて肝に銘じていただきたい。この研究成果が全国の装飾古墳や海外の壁画遺産などの保存に寄与することを切に願う。高松塚古墳の発掘調査（昭和47年）に少しだが参加した一人としても期待している。</p>
(3) 文化遺産保護に関する国際協働		
A	委員評価	<p>【国立文化財機構】</p> <p>・文化や文化財への取り組みは世界平和に大きく貢献する。「平和の大使」とも呼ばれるゆえんだ。それは人々の心や精神を豊かにし、励まし、生きる喜びを与えてくれる。自信を呼び起こし、地域や国を愛する心や気持ちを醸成する。だから大切にしたい。次世代へ守り伝えていきたい。</p> <p>国立文化財機構の意義はまさにそれを中心になって進めることであり、誇りを持って仕事に向き合っていたきたい。文化遺産の保護はその大切な部門だ。経済優先になりがちな社会にあって、文化の位置や役割を高めることが肝心で、文化を通じた国際協働はこれからさらに力を入れるべき分野だろう。</p>
	A	<p>【東京文化財研究所】</p> <p>カンボジアのアンコール地域で継続する遺跡の修復事業は着実に進んでいる。奈文研も25年にわたって同地域の遺跡の修復作業にかかわり、祠堂を解体して一から復元するという難関事業に取り組んでいる。東文研も奈文研と情報を共有しながら、発展途上国の文化行政に貢献していることは喜ばしい。</p> <p>加えて、カンボジアの考古学者や文化財保存の技術者を育てることに大きな力を注いでもらいたい。すでにそのことは奈文研で行われており、ノウハウを共有し、日本の研究者が帰った後も文化財保存を自国で自立してできることが最終目標といってもいい。技術や知恵、知識を惜しみなくカンボジアなどに伝えてほしい。</p> <p>また、東文研で昨年9月、メキシコで同10月にそれぞれ行われた「紙の保存と修復」の研修は、実習を伴う内容で多くの外国の研究者に喜ばれ、開催後のフォローもしっかりしており、大きな成果を挙げている。日本人の繊細で緻密な作業を伝授するこの研修は、海外の博物館や美術館などから常に強い開催の要望があるだけ</p>

	<p>に、いっそうの発展が望まれる。参加者の満足度は100%であり、「適時性」「発展性」「効率性」も「A」で、年度計画評価も中期計画評価も「A」でよい。</p> <p>【奈良文化財研究所】</p> <p>奈文研は上記にも書いたアンコール地域での祠堂の解体と再構築を行った。昨年12月にはこのプロジェクトの25周年記念式典が現地であり、カンボジアから感謝されたという。ユネスコの現地視察もあり、高い評価を受けたことは喜ばしい。</p> <p>昨年9月に京都で会ったICOM（国際博物館会議）には研究員4人を派遣し、オフサイトミーティングも行うなど国際協働に取り組んだ。また、4月にはイギリス・セインズベリー日本芸術研究所と共同研究に関する協議を行って6月に「シルクロードの両極における信仰の伝来」をテーマに国際セミナーを開催した。</p> <p>このほか、ミャンマーやウズベキスタン、ロシア、中国など多様な国々との情報交換を行ったほか、ユネスコ・アジア文化センターの研修やワークショップ、国際会議などにも精力的に協力し、国際貢献を果たしたことは大きな成果だ。</p> <p>【アジア太平洋無形文化遺産研究センター（IRCI）】</p> <p>IRCIは今年で発足10年目を迎えた。ユネスコの目的に貢献するため、調査・研究を行うカテゴリー2センターとして、人材育成を担当する中国、情報ネットワークを担う韓国とともに役割を分担して2011年に設置された。</p> <p>ところが主体をなす研究部の正職員は今でもわずか1人で、あとはアソシエイトフェローが4人を占めている状態だ。任期付きで不安定な身分のアソシエイトフェローが多数を占める状況は他の機関でもみられ、毎年、改善を要望しているが、予算面で難しいのが現実だ。だからといって放っておいていいはずはない。絶えず、正職員の増加を求めている。</p> <p>IRCIも継続的な取り組みが必要な分野だけにこの状態を早く解消したい。来年、満10年を迎える中で改善していただきたい。中国や韓国のカテゴリー2センターは人員も予算も充実していると聞く。同時に設置された他の2つのセンターにそんな色のないような態勢を、機構も国も作り上げてほしい。</p> <p>少ない人員と予算で懸命に活動している状況が、自己点検評価報告書からはっきりと読み取れる。文化財保存活用基金を活用して紛争後のアフガニスタンや東ティモールなどのパートナー機関と連携をとり、治安悪化が心配される中で無形文化遺産の現地調査や卓上調査を精力的に実施した。また、東京や京都で3回ものワークショップを開催し、無形文化遺産の情報収集や記録作成、保護に向けての取り組みについて意見を交換。いくつもの課題が前進した。</p> <p>しかし、驚いたのは継続性が「C」評価だったこと。IRCIの叫びが聞こえてくるようだ。素晴らしい活動なのに事業予算の安定的確保が難しいとして「C」評価にした。無念さが伝わる。機構としての前向きな対応を切実に願う。継続性が「C」であってもIRCIの責任ではないから、中期計画評価は「A」であってよい。科学研究費を東文研の協力で何とか引き出せないだろうか。今後も東文研と共同歩調をとって国際社会の信頼に応える精力的な活動を続けていってほしい。</p>
--	---

(4) 文化財に関する情報資料の収集・整備及び調査研究成果の公開・活用		
A	委員評価	<p>どんなに素晴らしい研究や業績であっても、情報が公開され、国民や世界の人々に共有される状況でなければならない。「文化財は国民共有の財産」だからだ。その意味で、情報の公開と活用が極めて重要なことは論を待たない。</p> <p>【東京文化財研究所】</p> <p>美術品入札会での目録「売立目録」に注目し、重要と思われる明治末期から戦前までの100冊の内容をデジタルアーカイブで公開したことは極めて注目され、高い評価を与えられてよい。視点が素晴らしい。</p> <p>明治以降、武家や豪商などが経済的な苦境から所蔵する美術品を手放すケースがあり、日本や東洋美術を代表するような名品までもが売りに出された。東文研はこれらの売立目録を2532冊も所蔵しており、一大コレクションだ。従来からカードなどで情報は公開、利用されてきたが、2015年から東京美術倶楽部との共同で目録のデジタル化事業に取り組み、昨年、デジタルアーカイブとして完成した。</p> <p>売立目録には、行方不明の美術品や関東大震災、第二次大戦などで失われた美術品などもあり、得られる情報は豊富だ。売りに出した当時の所有者の経済的状況がわかるなど戦前における政治、経済、社会的な研究の重要な資料になるほか、目録を経年的にたどれば不明の美術品に近づくことが可能になるかもしれない。</p> <p>最近、1億円の値がついた銅鐸が最初のカラーページに載った売立目録を見たことがあった。見ているだけで楽しい売立目録だが、今後もしっかりと収集し、できるだけ多くの図版が入った目録の公開をお願いしたい。買い取った人を突き止めることは難しいが、それらを探ることで美術品の動きに迫るのも可能かもしれない。</p> <p>【奈良文化財研究所】</p> <p>新庁舎（奈良市）が2年前にオープンした。立派な庁舎と充実した設備は考古学のナショナルセンターとして調査、研究、保存を担う機関としてふさわしい。</p> <p>ところが重要な情報公開にとって肝心の一般の人が利用できる資料閲覧室や図書資料室が狭いように感じた。そのことはすでに外部評価で報告したと思う。</p> <p>今回、利用者の立場で改善してくれたことに感謝したい。書庫内に閲覧機を増設し、閲覧スペースを拡張するとともに、閲覧室の照明器具を増やして机上の明るさをいっそう増強した。利用しやすくするための改良であり、喜ばれていると思う。ただ、一般利用者は229人にとどまって少ない。膨大な図書をさらに利用してもらうような取り組みを望む。</p> <p>平城宮跡資料館で行った夏期企画展「ならのみやこのしょくぶつえん」は、奈良国立博物館の「祈りの世界の動物たち」と同時期に開催。奈良にある国立文化財機構の施設が連携し、関連するテーマで展覧会を行った初めての試みだった。好評で、両方の展覧会を見る人もおり、今後も機会あるごとに連携して関連展示を実現していただきたい。奥の深い展示になる。今回は入館料がどうだったか不明だが、共通券を出して割引があるようにすれば入館者にとってより便利だろう。</p>
	A	
(5) 地方公共団体等を対象とする文化財に関する研修及び協力等		
A	委員評価	<p>【東京・奈良文化財研究所】</p> <p>・東文研、奈文研とも、ナショナルセンターとして全国の行政機関や研究機関を指導し、助言する役割を担う。その責務を果たすために多彩なプログラムを用意して自治体職員を研修したり、全国に出かけて指導したりしている。とくに日進月歩の文化財調査における最新の技術を伝え、地方でも活用することが重要だから、両研究所員の苦労も並大抵ではないが、地方のレベルアップに尽力していただきたい。</p> <p>・奈文研の文化財担当研修は昭和49年から続いており、延べ9900人もの受講者を数えた。今年度も14課程に目標値を上回る199人もの受講者があり、技術の向上に大きく貢献した。一方、東文研でも博物館や美術館の保存担当学芸員を対象に研修を実施したり連携大学院の学生を教えたりして、人材育成に貢献している</p>
	A	

		ことは高い評価を受けて当然である。
--	--	-------------------

その他（総合的な事項、自己点検評価について等）

- ・新型コロナウイルスの感染拡大で、国の財政が危機的な状況に陥ることが危惧される。そんな中で漸減する国から機構への運営費交付金がさらに削減されないか心配だ。そのようなことがないように今から対策を考えておくべきだろう。いつもしわ寄せがくるのは文化行政だからだ。
- ・今年4月7日の参議院文教科学委員会で文化芸術問題が俎上にのぼった。萩生田文科相や今里譲・文化庁次長は「文化芸術振興を倍増するのを支援」「(博物館などが) 役割を十分果たせるよう必要な人材確保に向けた支援に努める」「博物館支援策をしっかりと講じる」と答えている。脳裏に焼き付けてほしい。
- ・博物館や機構の自己点検評価報告書や機構を評価する資料を送ってほしい。研究所と博物館は密接に関係する。機構をバックアップするためにも資料がいただきたいし、オブザーバーでもいいので総会にも出席させていただきたい。そこで博物館や機構関係者と交流することで報告の中身が一段と濃くなる。「以前のように博物館にもかかわりたい」との委員の要望に、松村理事長は昨年、「何とかする」と述べている。

(参考)

【年度計画に対する総合評価】

評価は以下の評定区分を使用している。

- S：所期の目標を量的及び質的に上回る顕著な成果が得られている
 - A：所期の目標を上回る成果が得られている
 - B：所期の目標を達成している※**
 - C：所期の目標を下回っており、改善を要する
 - D：所期の目標を下回っており、業務の廃止を含めた抜本的な改善を要する
- ※B評定が標準となる

独立行政法人国立文化財機構外部評価委員会

委員長	河合正朝	(千葉市美術館館長)
委員	小笠原直	(監査法人アヴァンティア法人代表 代表社員 公認会計士)
委員	児島薫	(実践女子大学文学部美学美術史学科教授)
委員	小松大秀	(公益財団法人永青文庫館長)
委員	齋藤努	(国立歴史民俗博物館研究部教授)
委員	榊原悟	(岡崎市美術博物館館長)
委員	坂本弘子	(朝日新聞社常勤監査役)
委員	出川哲朗	(大阪市立東洋陶磁美術館長)
委員	寺崎保広	(奈良大学文学部名誉教授)
委員	寺田吉孝	(国立民族学博物館名誉教授)
委員	名児耶明	(元公益財団法人五島美術館副館長)
委員	浜田弘明	(桜美林大学教授)
委員	柳林修	(読売新聞社「寺社プロジェクト」アドバイザー、 元読売新聞編集委員)

独立行政法人国立文化財機構外部評価委員会 博物館部会

部会長 名見耶 明 (元公益財団法人五島美術館副館長)

副部会長 浜 田 弘 明 (桜美林大学教授)

委員 小 松 大 秀 (公益財団法人永青文庫館長)

委員 榊 原 悟 (岡崎市美術博物館館長)

委員 出 川 哲 朗 (大阪市立東洋陶磁美術館館長)

独立行政法人国立文化財機構外部評価委員会 研究所・センター部会

部会長 寺 崎 保 広 (奈良大学文学部名誉教授)

副部会長 寺 田 吉 孝 (国立民族学博物館名誉教授)

委員 児 島 薫 (実践女子大学文学部美学美術史学科教授)

委員 齋 藤 努 (国立歴史民俗博物館研究部教授)

委員 柳 林 修 (読売新聞社「寺社プロジェクト」アドバイザー、
元読売新聞編集委員)